

# 金山城跡(太田市)

築城年代:文明元年(1469年)、築城者:岩松家純

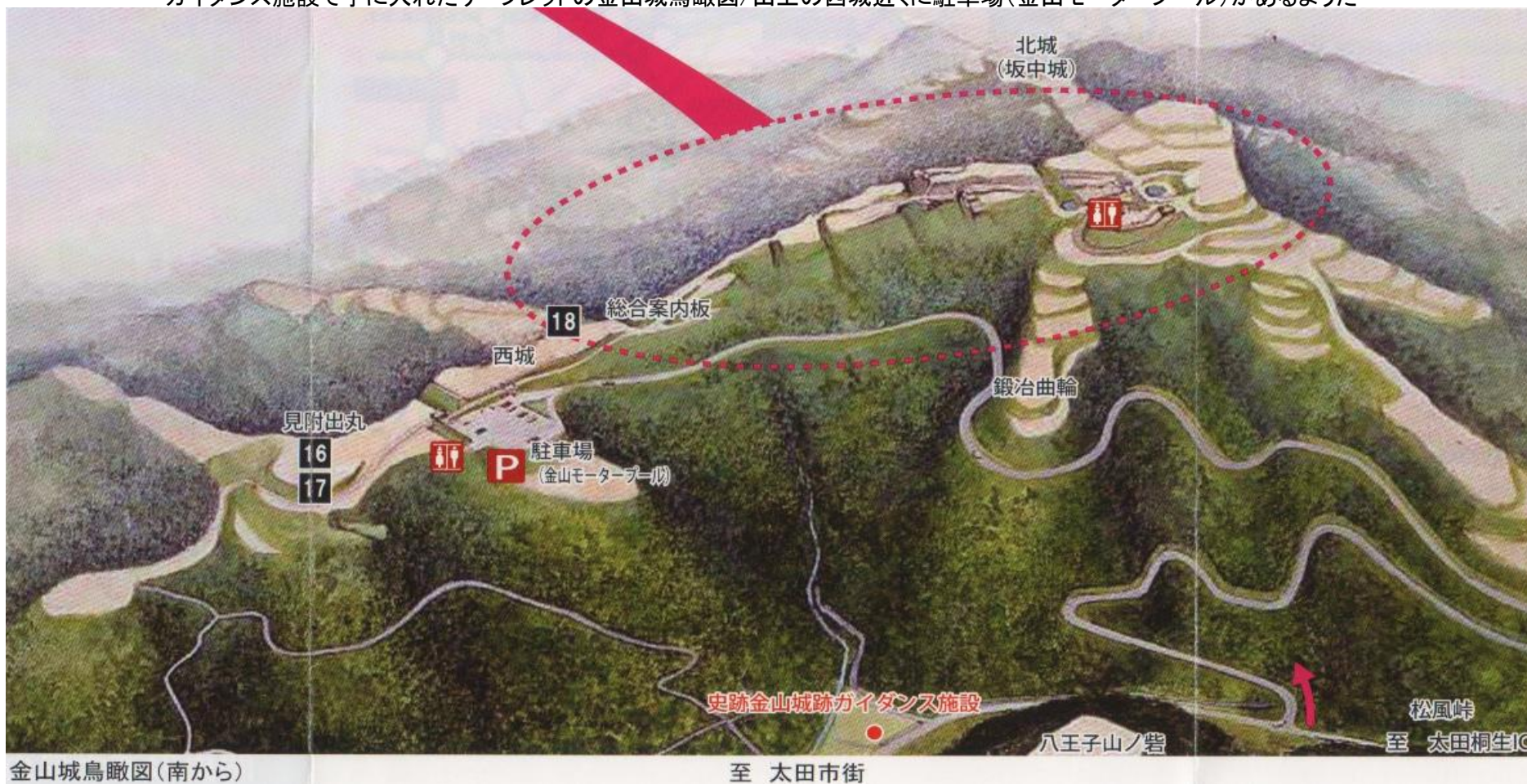
ここは金山城跡下にある「史跡金山城跡ガイダンス施設」



あの隈研吾の設計らしい



ガイダンス施設で手に入れたリーフレットの金山城鳥瞰図/山上の西城近くに駐車場(金山モータープール)があるようだ



金山城鳥瞰図(南から)

至 太田市街

八王子山ノ砦

松風峠 至 太田桐生IC

ガイドンス施設の裏手にあるこの山道を登って行くと城跡の一番西のエリアに行けるようだが



今回は車で前方の案内表示のある所に左手に登って行くこととする



「金山公園」と記された石碑



急坂を登って行くと途中にこんな所があった



説明板が立っている





# 本城大手口

大手道を登りつめ、本城に達した谷間に、地形を利用して柵形さしが造られている。

北・西・東を高い石垣で囲まれ、内に番所を構え大手道は鍵ノ手に曲って城内に入る。柵形に進入した敵は三方より攻撃される。

昭和五十五年三月



本城大手口復原図

文部省  
群馬県  
太田市



発掘調査中のようだ



こんな塩梅



さて、これは山上の駐車場に立つ太田市観光ガイドマップ/実城(みじょう)とはいわゆる本丸のことらしい



上に案内板が見える





案内板が立つエリアは「西城」で右手に行くと「実城」、左手は「見附出丸」に行くようだ





こちらが左手の「見附出丸」方面/こちらへは後程行くこととする



こちらが「実城」方面(東方向)/まずはこちらへ行ってみよう



ここは総合案内板のある所





総合案内板から「西矢倉台」へと進んでみよう



ここを登って行く





東方向へと進む





「西矢倉台」の更に向こうに「物見台」がある



説明坂がある



ここから右手に折れ下って行くと棧道(かけはしみち)へと繋がるようで、この道が「旧通路」ということらしい

# 旧通路

西矢倉台西堀切内の通路を隠すように盛られた、土塁状の高まりの下からは、通路の縁石と思われる石列が見つかりました(写真1)。この石列により、西矢倉台西堀切内の通路よりも古い時期に棧道からまっすぐ西へ進む通路があったと考え、発掘調査によって通路を確認しました(写真2)。この通路は、岩盤に丸太をかけて造られた棧道とは異なり、地山を削り出して通路を造っていたことがわかりました(断面図参照)。

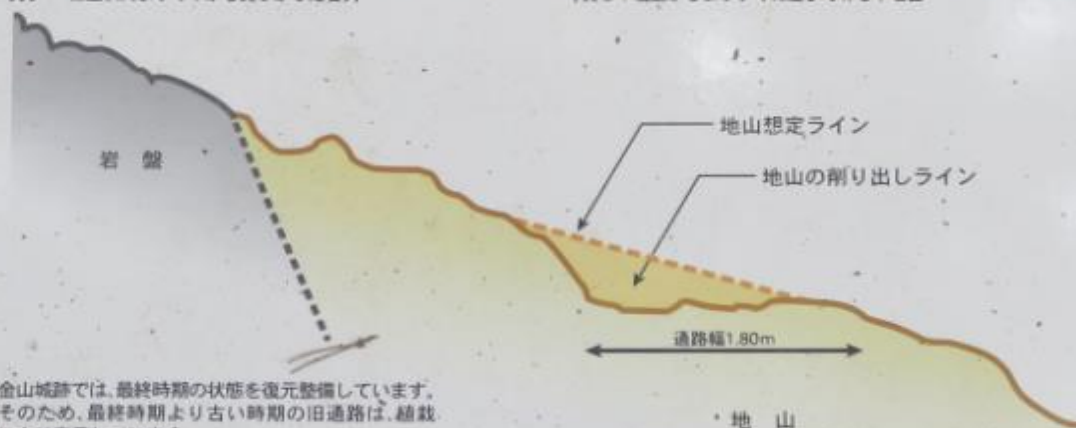
棧道は、急斜面で岩盤が張り出しているため岩盤を加工して通路を造り、岩盤の張り出していないこの部分では、地山を削り出して通路を造っています。このように、当時の地形を利用して通路を造った様子がうかがえます。



写真1: 土塁状高まりの下から見つかった石列



写真2: 棧道からまっすぐに延びている平坦面



金山城跡では、最終時期の状態を復元整備しています。そのため、最終時期より古い時期の旧通路は、緑色により表示しています。

更に進むところは「西矢倉台西堀切」の手前



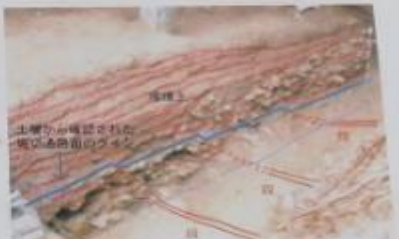
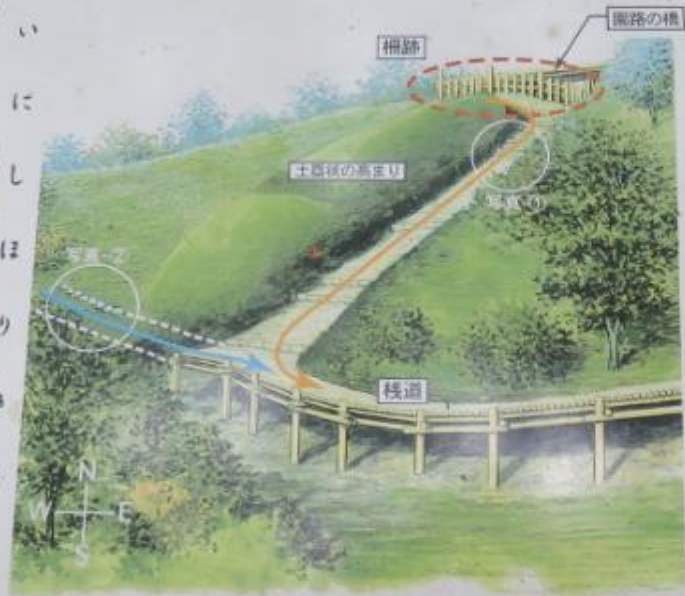
説明坂がある



# 西矢倉台西堀切

西矢倉台西堀切は、西城から奥城(本丸)までの間にある4つの堀切のうち、一番西寄りにある堀切です。この堀切は他と異なり、堀底に石を敷いて通路(写真①)として利用しており、通路の先は棧道(急斜面に沿って掛けられる通路)へと続いています。また、通路の北側には柱穴(柱を支えるために掘られた穴)があり、敵兵の北側からの侵入を防ぐための柵があったと考えられます。

堀切の西端には、堀切を掘り下げる際に出た土や石を土塁状に盛り上げ、堀切内を敵兵から「隠す」ための工夫がなされていたようです。また、この土塁状の高まりの下から通路の縁石(写真②)が見つかり、堀切内の通路よりも古い通路があったことがわかりました。古い時期には、棧道から西へ通路が延びていたようです。



①堀切を北から南へ下りる段状の通路跡が見つかりました。



②土塁状の高まりの下から通路の縁石が発見されたため、堀切内の通路よりも古い通路があったことがわかりました。

※堀切とは、山の尾根筋を意図的に分断し、敵の侵攻を防ぐための施設です。山城では土塁と共に基本的な防御施設です。



当時の堀切断面

※柵跡にある木橋は当時あったものではなく、園路用に整備したものです。

これは園路の橋



右手を見るとこれが「西矢倉台西堀切」





その堀切を進んで行くと説明坂が見える/堀底には石が敷かれている

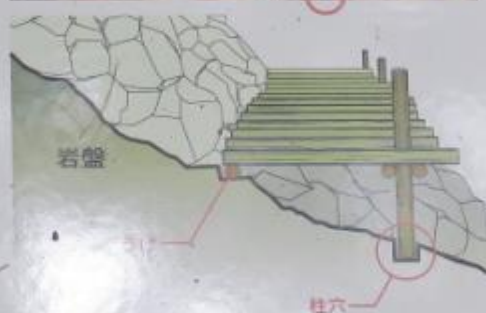


正面は「栈道(かけはしみち)」



# 棧道

か 通路が見つかった西矢倉台西堀切から城の中心  
け 部へと続く通路を確認するため、山の斜面を調査  
は しました。その結果、山側には丸太をうける跡が、  
し 谷側には16個の柱穴の跡が見つかりました。  
このことから、西矢倉台西堀切内の通路から続く  
道は、急斜面に沿って丸太をかけて造られた「棧道」  
であったことがわかりました。  
この棧道は、金山城の西を守る「西城」と城の中心  
部の「実城」とを結ぶ連絡道の一部として造られた  
ものであり、万一、西城が敵に落とされたときには、  
この棧道を壊して敵の侵攻を防ごうとしたと考えら  
れます。そのため、当時の棧道は、非常に簡単に  
造られていたと思われます。



発掘調査で確認された柱穴の跡をそのまま使って整備しています。

この「栈道」は金山城の西を守る「西城」と城の中心部の「実城(みじょう)」とを結ぶ連絡道の一部だったようだ



下から見上げたところ/急斜面に沿って造られている



先程の堀切を見返したところ



堀切を戻る/前方の園路の橋の辺りに敵兵の北からの侵入を防ぐための柵があったという



橋の下から北方向を見たところ





橋の上から北方向を見たところ/急崖を下って行く



さて、園路を更に東方向に進むとまた説明坂がある



# 西矢倉台下堀切

西矢倉台下堀切は、西矢倉台の西下に造られた防御施設で、西城から実城(本丸)へ向かう間の二番目の「堀切」となります。

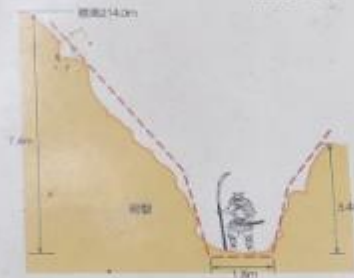
この堀切は、大堀切、物見台下堀切と比べて規模は小さく、堀切は実城に近づくにつれ幅が広く、深く造られています。断面の形は、上部が逆「ハ」の字であるのに対して、下部は箱状(Ⅱ)に掘られ、簡単に攻め登られないように工夫されています。

また、この堀切は西矢倉台西堀切のように通路として使われた跡はありません。堀切北端を横断する通路は、埋まってしまった堀切の上を整備した園路で、当時の通路ではありません。堀切は北までずっと続いており、今みなさんが立っている足元の約1.5m下が堀底となっています。

※堀切とは、山の尾根筋を意図的に分断し、敵の侵攻を防ぐための施設です。山城では土塁と共に基本的な防御施設です。



堀切内には崩落した石や土砂が厚く積もっていました  
(園路から見た堀切/調査時)



当時の堀切断面



右手を見ると、ここが「西矢倉台下堀切」



堀切を進んでみる



先程の「栈道(かけはしみち)」を進んだ所に出た



この先が先程見た「栈道」の始まり部分



振り返って反対方向を見たところ/ここを登って行くと「西矢倉台」に至るようだ





これは堀切を見返したところ



堀切を戻る/堀切が上部が逆「ハ」の字、下部は箱状に掘られているのが見て取れる



その先(北側)はこんな感じになっている



さて、園路を更に東方向に進む



右手を見ると平場が見える



ここが「西矢倉台」



# 西矢倉台通路

に 西矢倉台通路の発掘調査では、新旧2時期の通路が確認されました。

し この2つの通路は、外側(谷側)が旧時期、内側(山側)が新時期であると考えられます(通路図参照)。

や 2つの通路の間には、岩盤を加工した柱穴が並ぶように12個見つかっています(写真1)。また、この柱穴列は新時期の通路面の下からも確認されています(写真2)。柱穴列の性格については、「通路脇の柵」あるいは新時期通路を安定させるための「土木工事」に伴う物と考えられます。

ら 一般的に、通路を造り直す時は外側(谷側)に造り直すのですが、西矢倉台通路では、石垣の外側は急な斜面になってしまうため、より安定する内側(山側)に通路を造り直し、石垣も積み直しています(断面図参照)。

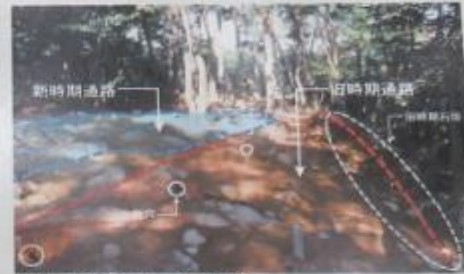


写真1: 並ぶように見つけた柱穴

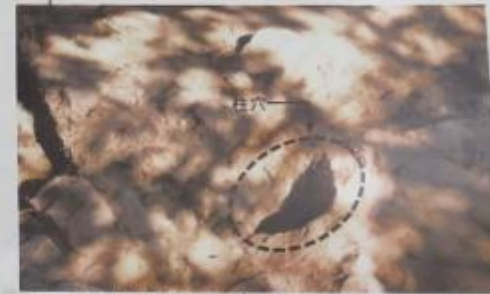
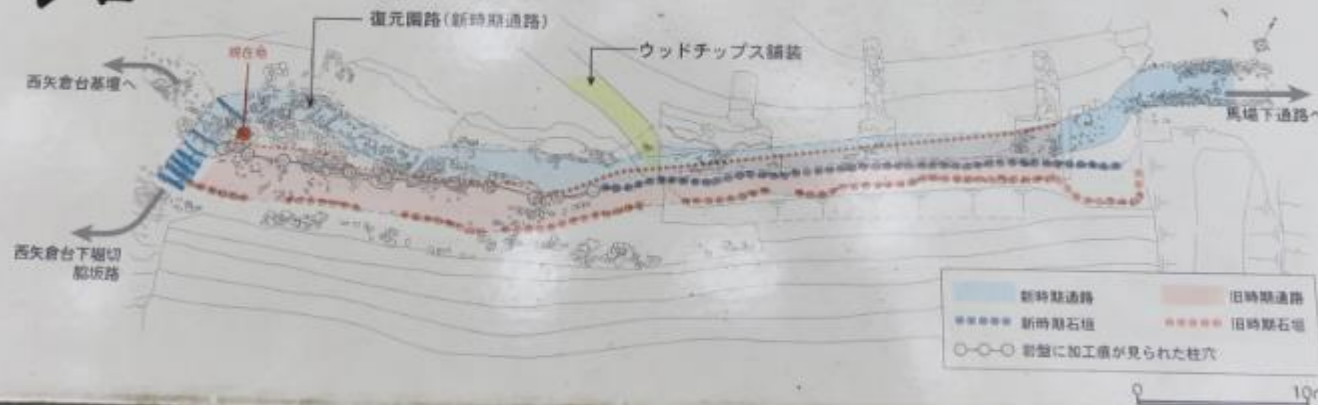


写真2: 新時期通路面の下から見つけた岩盤を加工した柱穴  
旧時期の石垣は、石階段から東側では一番上の石のみの表示を、石階段から西側では離れた状態を整備しています。



南方向の眺め





アップで見たところ/もやっていてはっきり見えない



眼下を見ると通路があり、これが「西矢倉台下堀切脇通路」のようだ



これは右手(西方向)を見たところ



「西矢倉臺趾」と記された標柱が立っていた



東方向を見たところ/こちらの「西矢倉台通路」を進むと「馬場下通路」へと向かう



「西矢倉台」方向を東側の「西矢倉台通路」から見たところ



# 主要部

足尾山地・上毛三山  
間山・八ヶ岳(一部)・  
深部などを見渡すこ



用道路  
可車) が通行しますので、  
ください

日本百名城スタンプ設置場所  
開場 8:30 ~ 17:00  
(6月~9月は18:00) 年中無休

★眺望抜群のポイント  
秋~冬の晴れた日には、秩父山地  
の上に頭を出す富士山や、広大  
な関東平野の先には、相模大山、  
スカイツリー、筑波山を望むこ  
とができます。

さて、「西矢倉台通路」を「馬場下通路」へと進むと前方に「物見台下堀切」が見えてくる





正面は「物見台下堀切」とそこを渡る土橋/前方は「土塁石垣」で、ここから先が見通せないように曲がった通路となっている



# 馬場下通路

物見台下土橋から<sup>土壘</sup>豎堀までの間には石敷きの通路が発見されました。この通路は防壁上、土橋から見通せないように曲がった通路となっています。通路は、豎堀にかかる木橋方向と、堀底へ下りる階段へ分岐しています。

石敷き通路の南側には、谷側からの敵に備えて通路を隠すと共に、敵を威圧するための土壘石垣が通路に沿って約22m設けられていました。なお、土壘石垣の中央部は、石垣の崩れた状態で整備しています。



馬場下通路、土壘石垣調査時(西より)



この「物見台下土橋」の先は石敷きの通路となっている



右手を見たところ/堀切が下って行く



右手を見たところ/「物見台」の岩肌が見える



「物見台」を見上げたところ



「物見台下堀切」を見たところ



その左手を見たところ/こんな岩盤を堀切ったということ





堀切下から土橋越しに堀切上部を見上げたところ



振り返って堀切下部を見たところ



さて、土橋を渡ってその先の石敷き通路を進もう



石敷き通路は前方でこの先にある豎堀にかかる木橋方向と堀底に下りる階段に分岐している



振り返って土橋方向を見たところ



ここが豎堀にかかる木橋と堀底の通路に下りる階段(右手)



これは豎堀を見下ろしたところ/その向こうに一段下がって平地が見える



アップで見たところ





その平場を反対側から見たところ/ここは「馬場下曲輪」/前方の豎堀の近くに説明坂が見える/左手には標柱が立っている



「大手口馬場」と記されているが



これが豎堀の傍にある説明坂



# 馬場下曲輪

ば  
ば  
し  
た  
く  
る  
わ

馬場下通路の南下に立地する馬場下曲輪は、発掘調査の結果、岩盤を割り貫いた建物の柱穴が見つかりました。また、竖堀に沿って石垣でできた土塁が延びていることがわかりました。現在整備した土塁は、石垣が崩れた状態を表現しています。

この曲輪からは、地鎮などのまじないに使われたと思われる輪宝墨書土器（素焼きの坏に「輪宝」が墨で描かれています）や、鍛冶工房で使ったと考えられるフイゴの羽口などが見つかりました。



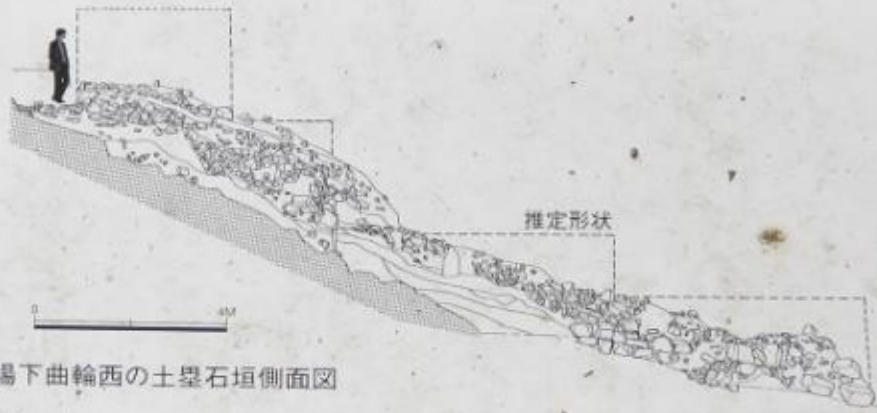
① 馬場下曲輪で見つかった柱穴（北より）



② 馬場下曲輪西の土塁石垣調査時（西より）



まじないに使われた輪宝墨書土器



馬場下曲輪西の土塁石垣側面図

さて、豎堀にかかる木橋を渡ろう



右手に豎堀を見たところ/豎堀に沿って石垣でできた土塁が延びている



これはその豎堀下から木橋を見上げたところ/左手に説明坂が立っている



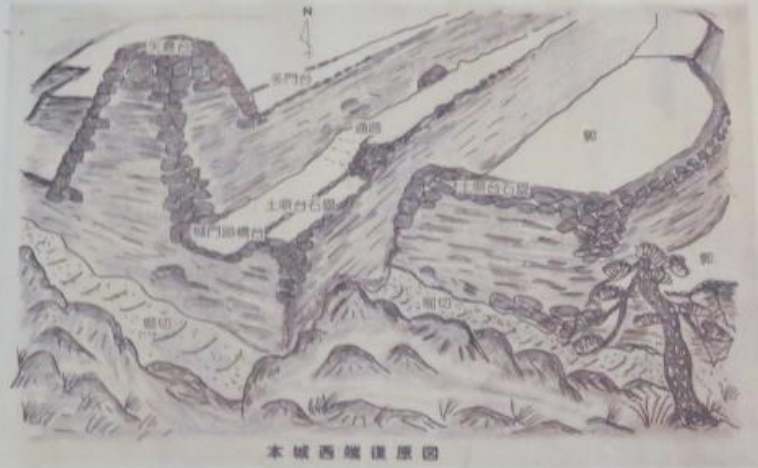
# 本城西端

西城より本城に至る迄に尾根に二ヶ所の堀切、三ヶ所の郭を構えて防禦してある。

此処にある矢倉台は長手口と太田口とを見張れる高所であり、東に続く尾根は多門台の役目を果している。

更に尾根から山腹にかけて堀切を構え大手口櫓形上に郭二ヶ所が造られている。

昭和五十五年三月



文部省  
群馬県  
太田市



豎堀をアップで見たところ/両サイドの土塁が石垣でできている



振り返って豎堀の先を見たところ/斜面を下り落ちて行く



さて、これは木橋を渡って振り返ったところ



そこで豎堀を見下ろしたところ



これは少し進んだ「馬場下通路」にある「礎石建物跡」/この左上が「物見台」と「馬場曲輪」を繋ぐ「馬場通路」





## 礎石建物址

岩盤斜面際の礎石石列は、発掘調査で確認された実物です。(柱間の木材は、補強のため整備上取り付けましたものです。)

反対側から見たところ



# 馬場下通路

木橋の東側では、石敷き通路が岩盤斜面を登って物見台から馬場曲輪へ通じる通路へと合流します。また、この通路は東端で行き止まりになっており、通路に面して建物の礎石や岩盤を割り貫いた柱穴が発見され、この狭い通路沿いに2棟の建物が存在していたことがわかりました。いずれも建て替えが行われており、最終時期の建物位置を表示しています。

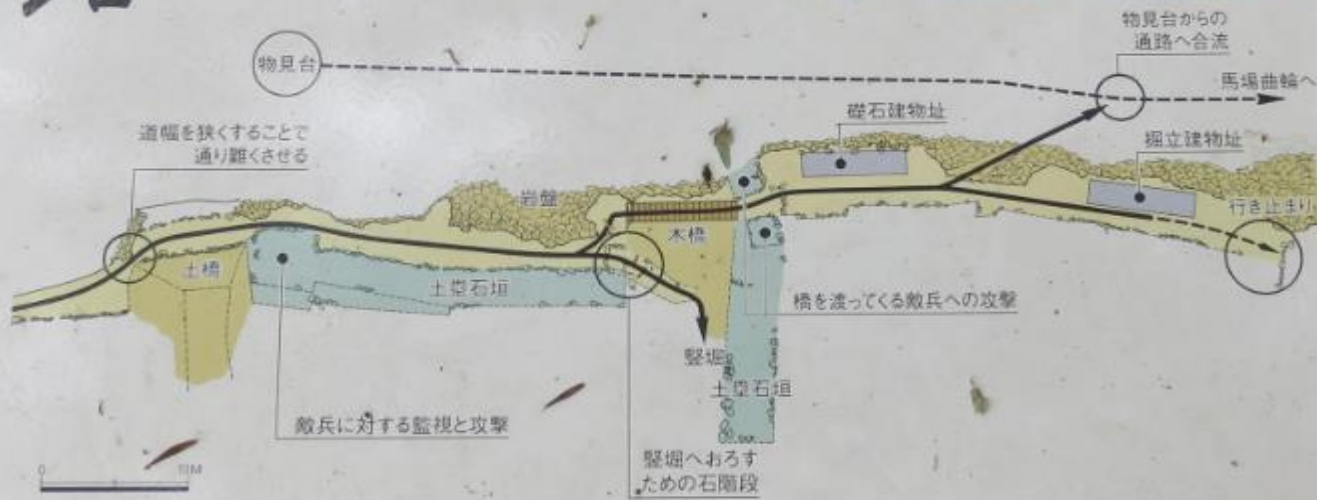
この馬場下通路には、下の図に示したように敵兵への防御と攻撃のための工夫が各所に見られます。



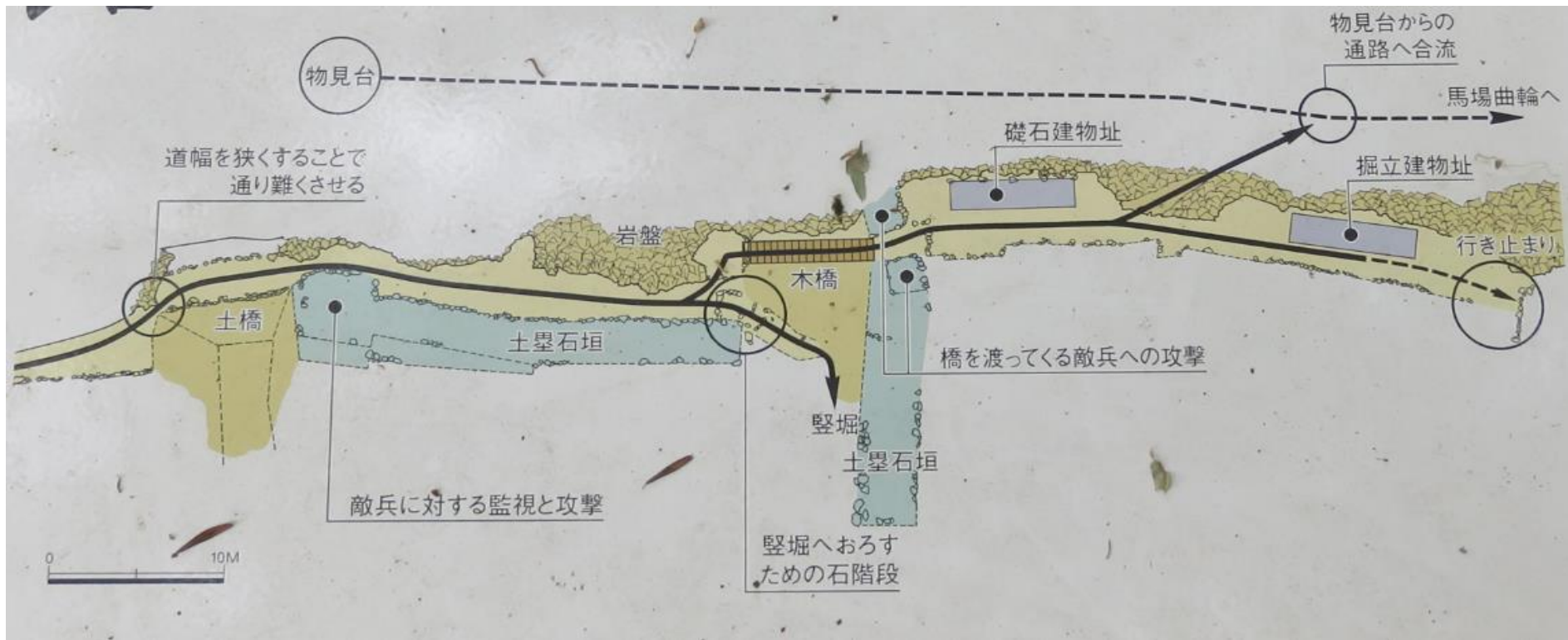
馬場下通路掘立建物址柱穴  
(東より)



馬場下通路跡石  
建物址調査時  
(東より)







左上に登ると「物見台」と「馬場曲輪」を繋ぐ「馬場通路」/右手前方に進むと行き止まりで、そこには「掘立建物跡」がある



これが「掘立建物跡」/正面遠方に見える建物がある所は「馬場曲輪」/右下は「馬場下曲輪」



# 掘立建物址

岩盤を削り貫いて柱を立てた簡易な建物址です。



反対側から見たところ



これは振り返って「馬場曲輪」にある建物を見たところ



さて、「物見台」と「馬場曲輪」を繋ぐ「馬場通路」に上ると、左手方向に「物見台」があるようだ



こちらの奥が「物見台」/少し先に標柱が立っている





振り返ってこちらに「馬場曲輪」にある建物が見える



標柱には「大手口馬場跡」と記されているが



前方に「物見台」が見える/すぐ手前に説明坂があり、その先に建物跡の礎石、右手には石塁が見える



# 馬場通路・石塁

物見台から東の北側斜面際では、物見台基壇と一体となって造られた幅約1.2mの石塁が約72mの長さで発見されました。この石塁は、北の長手口からの攻撃に備える防御上の効果があったと考えられます。さらに、長手口から、北側の岩盤を険しく見せるための視覚的効果を意識して、この石塁の上に築地塀が造られていたと考えられます。しかし、調査では上部の崩落が著しく、塀の痕跡は発見されませんでした。



(1) 石塁調査時(東より)

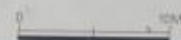
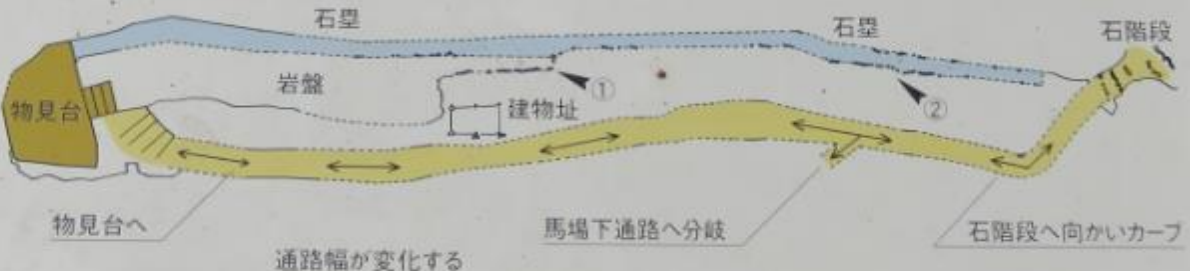
物見台から東の南側斜面際では、石敷きされた通路が発見されました。この通路は、物見台と東側に位置する馬場曲輪を結ぶと共に、途中で南下にある馬場下通路へと分岐しています。

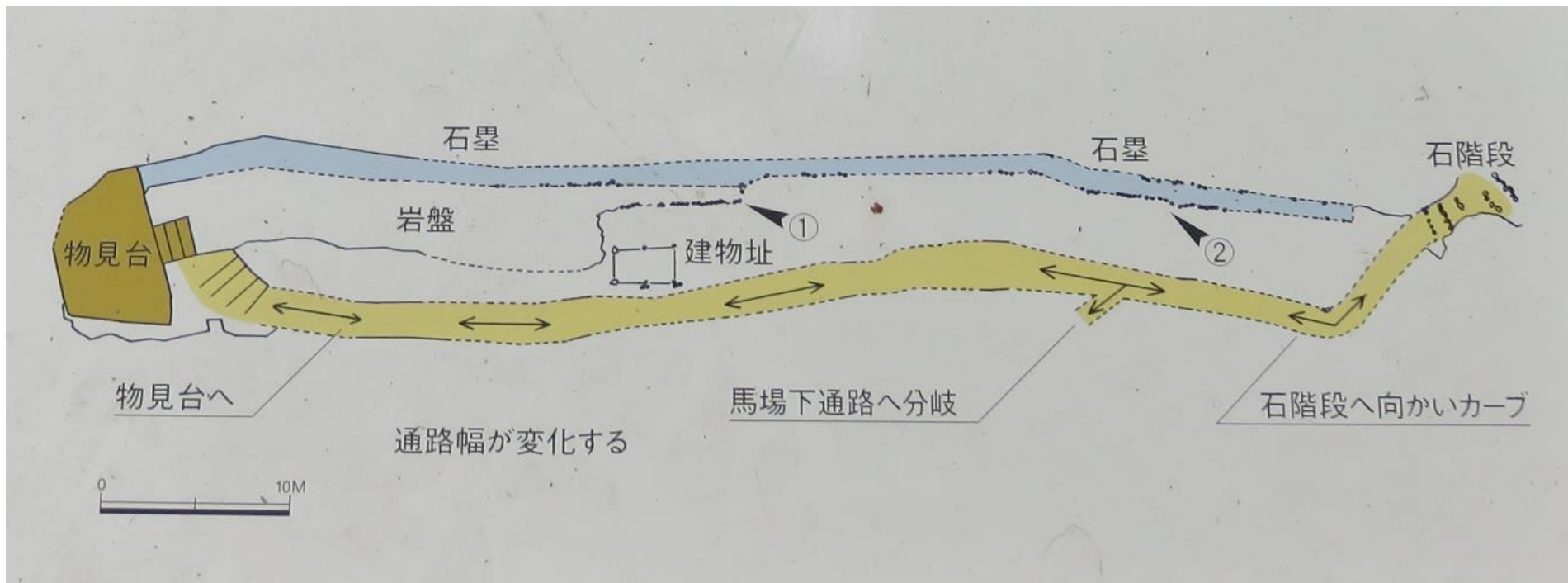


石塁から出土した大筒弾丸  
(直径2.75cm 重さ67.5g)



(2) 石塁調査時(南東より)





手前は建物跡の礎石/その向こうは石塁



反対側から見たところ



正面が「物見台」





# 物見台

ものみだい

物見台の基壇は、自然の地形に沿って等脚台形に造られており、基壇中央から物見矢倉と考えられる柱穴が4本発見されています。また、物見台基壇からは、釘や火縄銃の弾丸が出土しています。

この物見台からは、金山城の周囲が良く見渡せるため、敵（上杉謙信：天正2年）は、物見台から死角となる藤阿久へ陣を構えました。

※矢倉台に残る4本の柱穴位置に遺構表示施設を造りましたが、物見矢倉を復元したものではありません。



① 物見台基壇調査時（北東より）



② 物見台基壇東側柱穴調査時（東より）



③ 物見台基壇出土遺物

「物見台」に登って北方向を見たところ



同じく南方向を見たところ



その右下を見ると「物見台下堀切」とそこを渡る土橋が見える/右手が「西矢倉台」方向



その左手を見ると「土塁石垣」が見える



「物見台」から東方向を見たところ/石敷きされた通路跡の感じや石罫が見て取れる



さて、前方が「馬場曲輪」/「大手虎口」を守る兵が待機していた曲輪



ここが「馬場曲輪」/3箇所 of 建物址(1箇所は四阿)、柵列が表示されている





手前は建物址(平面表示)の一つ



反対側から見たところ/前方は「馬場通路」



左手は四阿表示された建物址/前方の柵列の向こうは「大堀切」



こんな塩梅/説明坂がある





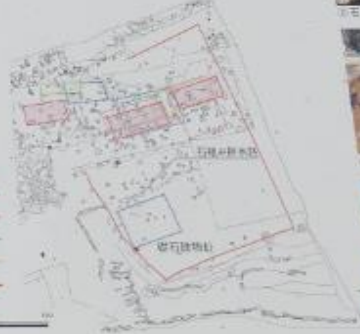
①馬場曲輪石地跡(東側) ②石を積む排水溝と小さな曲輪

馬場曲輪の調査では、上下2段の石地と、狭き楕円石列で区画された小さな曲輪が発見されました。ほかにも石積設がみづかり、曲輪を通る通路形態が明らかになりました。

# 馬場曲輪

物取倉から、東に約700メートル、北斜路側の石敷通路を経て、馬場曲輪へと寄りかかります。馬場曲輪の調査では、竪堀を掘り直した石列が200メートル以上見つか、竪堀関係から建物や構造物があったことがわかりました。また、建物は少なくとも3棟の跡が発見され、曲輪の生活圏は300メートルあり、積層に掘り替えを行っていたことも明らかになりました。

奈良時代の馬場曲輪における、建物3棟のうち両側の2棟は平屋表示としました。また、中央の1棟は柱穴の位置を利用して、斜めに四角を建てました。そのほか、曲輪の中央部分に石積み排水溝、曲輪全体を囲む構造物の存在も明らかとなり、あわせて整備しました。

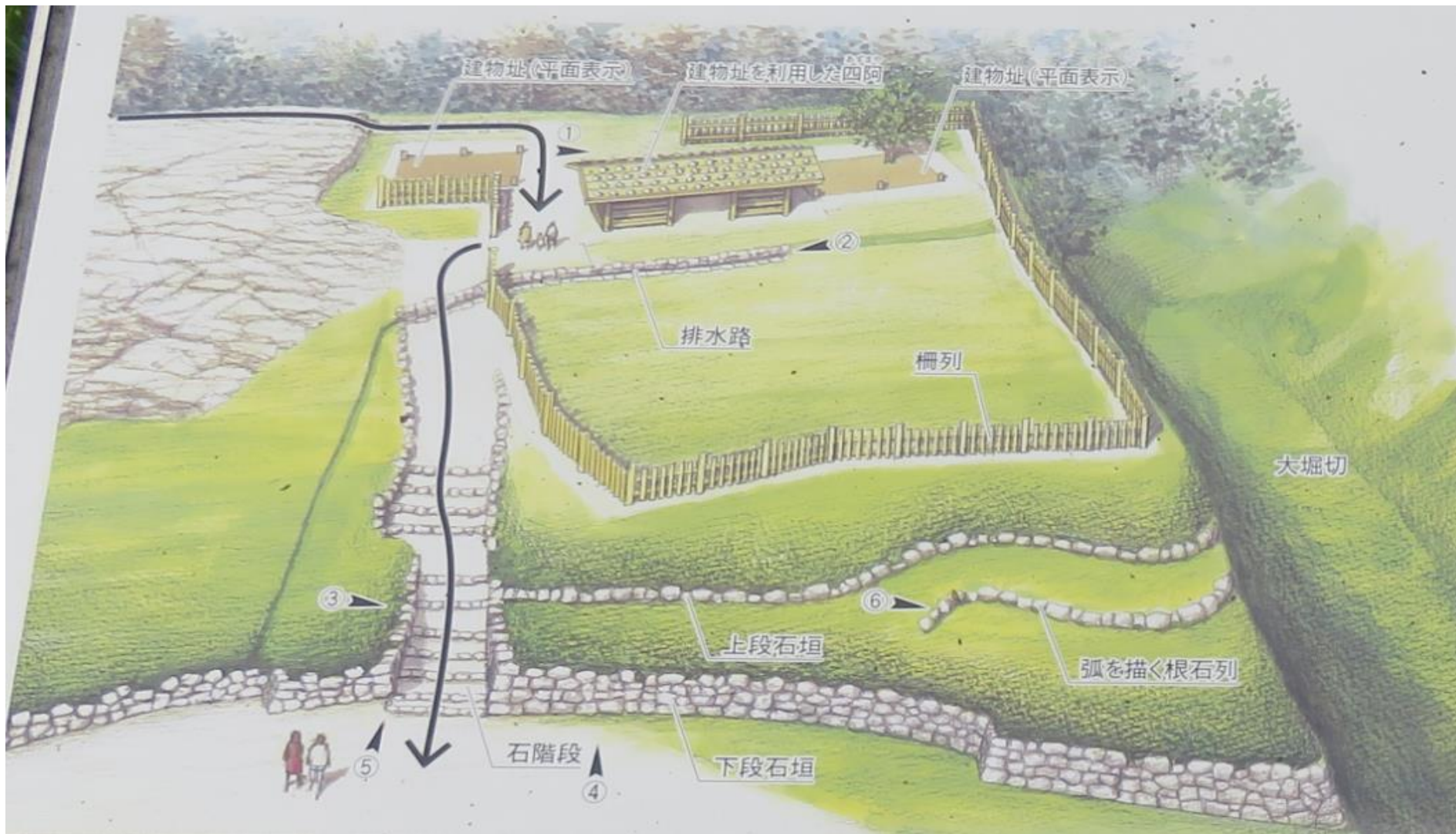


⑤馬場曲輪上下2段の石地跡(西側)



⑤ 馬場曲輪石階段(南より)

⑥ 弧を描く根石列と小さな曲輪



# 馬場曲輪

物見台から、東に向かう通路は、北斜面際の石敷通路を経て、馬場曲輪へと至ります。

馬場曲輪の調査では、岩盤を削り貫いた柱穴が240個以上見つかり、位置関係から建物や柵列があったことがわかりました。また、建物は少なくとも5回の建て替え、曲輪の生活面は3回の造成があり、頻繁に造り替えを行っていたことも明らかになりました。

廃城時代の馬場曲輪における、建物3棟のうち両側の2棟は平面表示としました。また、中央の1棟は柱穴の位置を利用して、新たに四阿を建てました。そのほか、曲輪の中央部分に石組み排水路、曲輪全体を囲む柵列の存在も明らかとなり、あわせて整備しました。



① 馬場曲輪柱穴調査時(西より)



② 石組み排水路調査時(東より)







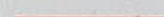
③ 馬場曲輪南側調査時(西より)

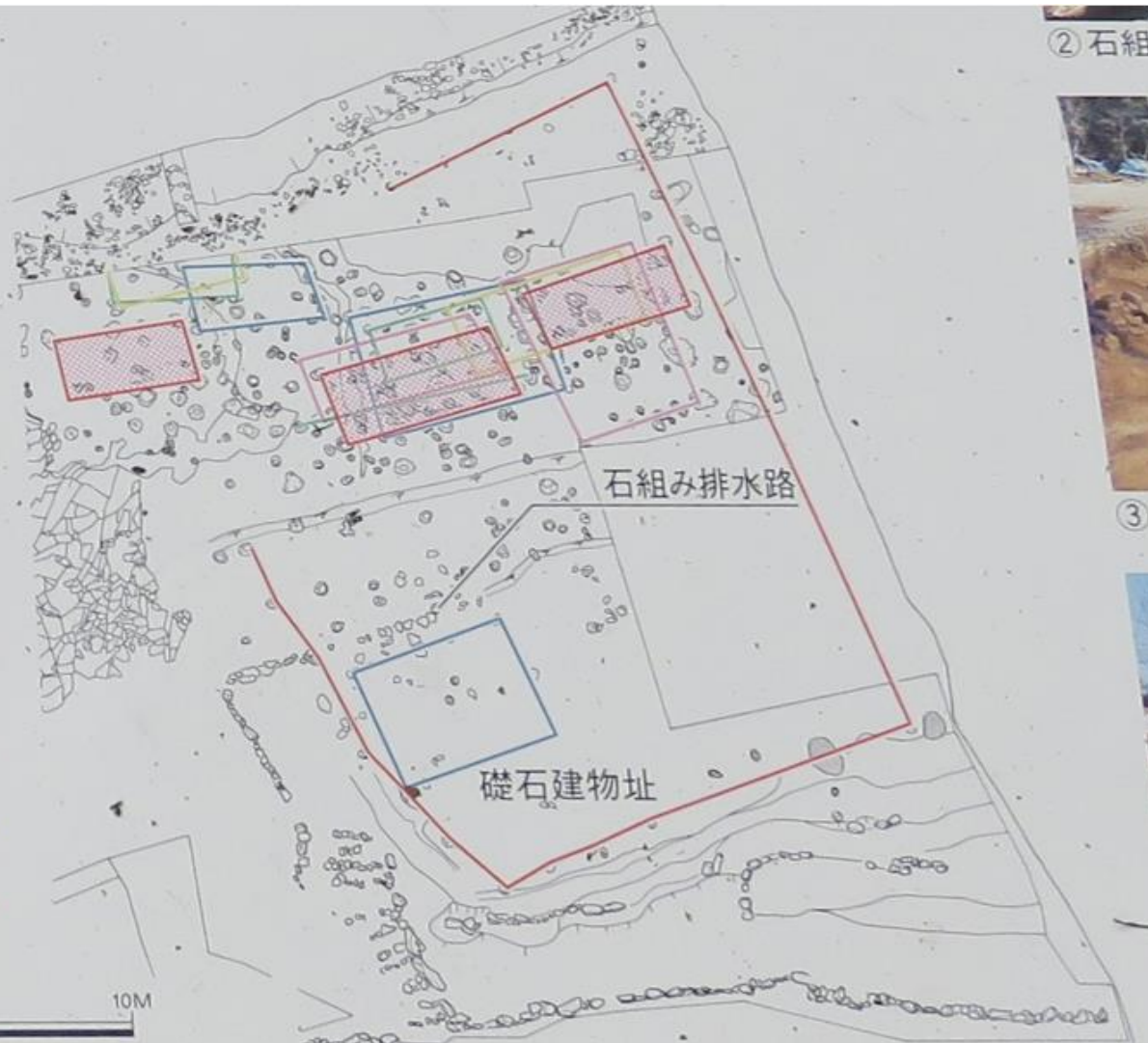


④ 馬場曲輪上下2段の石垣調査時(南より)



# わ 南

- I期 
- II期 
- III期 
- IV期 
- V期 



② 石組



③



四阿表示の右手にも平面表示の建物址がある



こんな塩梅/前方にも説明坂がある/柵列の向こうは「大堀切」

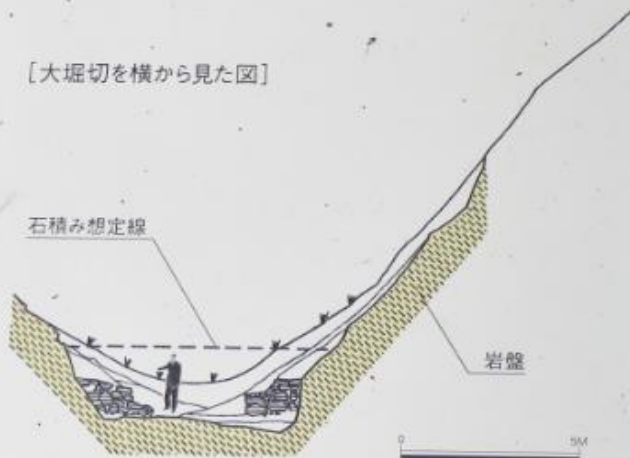


# 大堀切

敵兵が尾根つたいに進攻してくるのを防ぐために造られた堀切は、山城にとって一般的な防御施設です。とくにこの大堀切は、金山城のなかでも最も主要な防御拠点である大手虎口の目前にあるため、長さ約46m、掘り幅約15m、深さ約15mと大規模に造られています。

発掘調査の結果、この大堀切は尾根を形成している岩盤を深く掘り下げ、堀底は平らに削られていることがわかりました。また、堀底には長さ約7m、高さ約1.5m、幅約1.8mの石積みでできた竅状の防御施設が1カ所見つけられました。堀底が平らになっていることで、敵兵の侵入経路にならぬよう、障害物として造られたものと考えられます。

[大堀切を横から見た図]



① 尾根を深く掘り下げてつくられた大堀切



② 敵の侵入をはばむためにつくられた石積みの防御施設



③ 上部と中央が破壊された状態で見つかりました

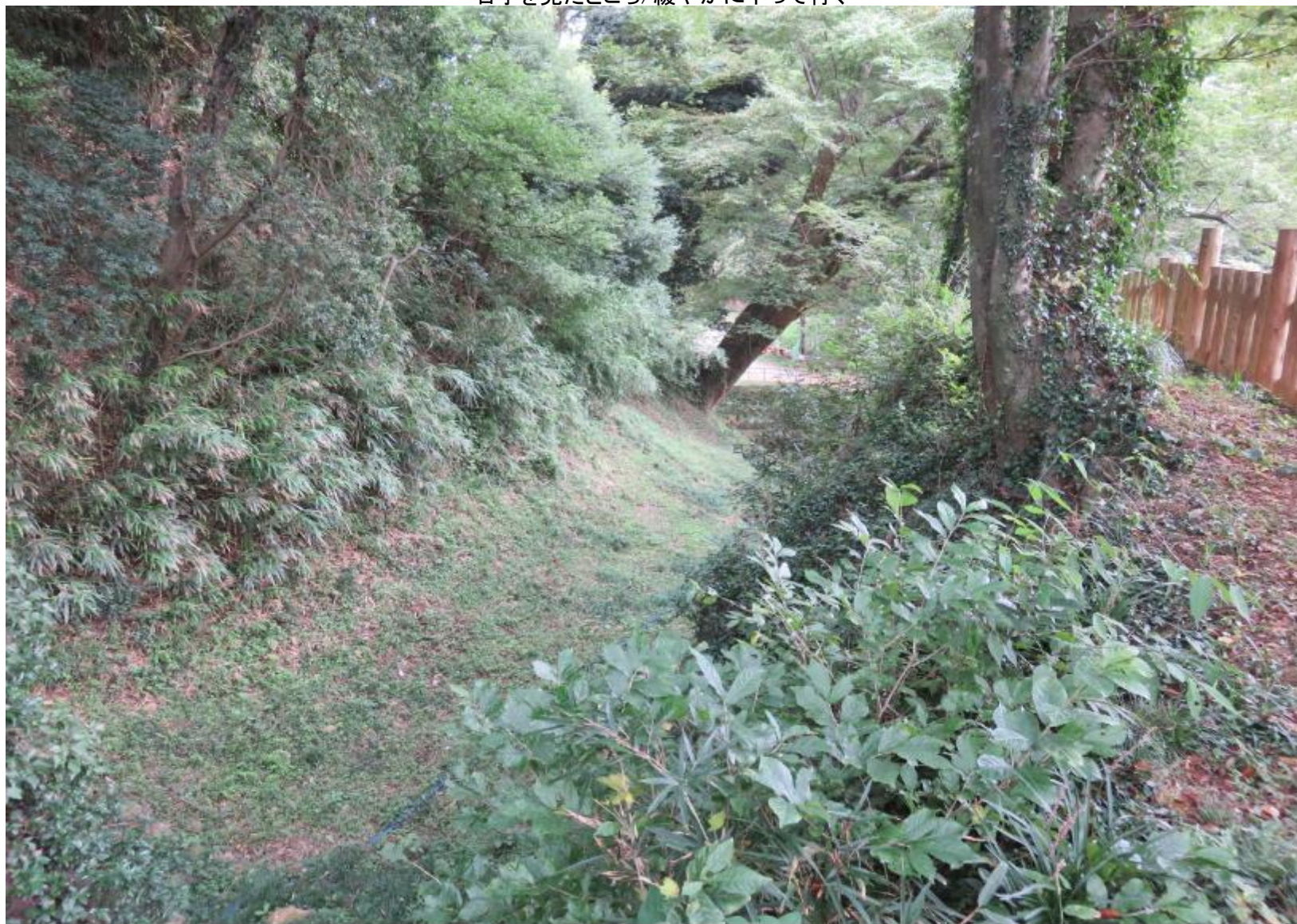
柵列の向こうの「大堀切」を覗き込んだ所



堀止の石積みが見られる



右手を見たところ/緩やかに下って行く



下から「大堀切」を見上げたところ





さて、これは「馬場曲輪」の南下で東方向を見たところで、左手に石垣が見える/右手前方は「大手虎口」



「上段石垣」と「下段石垣」の二段構成になっている



これは「上段石垣」をアップで見たところ



振り返ると「大手口馬場下残存石垣」と記された標柱が立っている



その向こう(南方向)はこんな斜面となっている/前方下で発掘調査中のようだ



その辺りをアップで見るところ



その斜面を東側から西方向に見たところ/前方のハウスは調査員の詰所か



反対に西側から東方向に見たところ/前方が「大手虎口」





さて、前方が「大手虎口」/左手にも標柱が立っている



「三の丸下塹壕」と記されているが



その先に「月ノ池」がある/その向こうが「大手虎口」

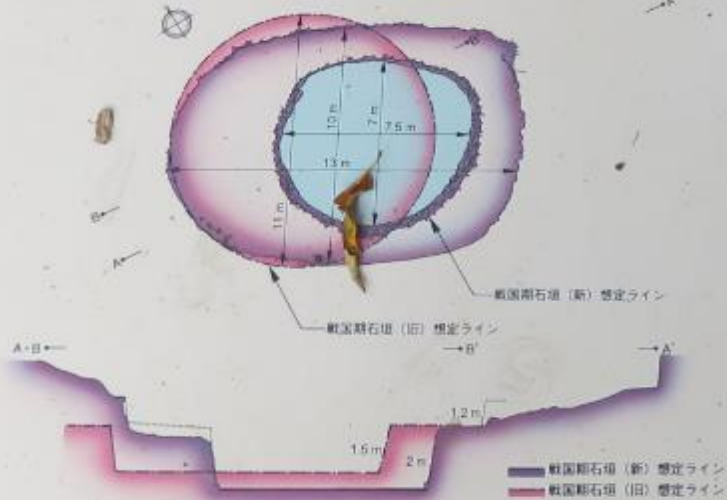


# 月ノ池

つ 発掘調査前の月ノ池は、汚泥が堆積する窪地状の池でしたが、調査の結果、月ノ池も日ノ池と同様に上下二段の石垣で囲まれた戦国時代の池だったことが明らかになりました。

さ 下段の石垣は、石敷き平坦面から約2m下に積まれており、その内側からは、加工された建築部材や石垣の石が多量に投げ込まれた状況が見つかりました。なお、この石垣については、最上部以外、戦国時代の石垣をそのまま残して整備しました。

の 月ノ池の底は、粘土層になっており、谷斜面からの表流水や浸透水が溜まるようになっていたことがわかりました。また、月ノ池は、池の石垣が一段しかなかった時期があったこともわかりました。月ノ池は谷地形を利用して造られているため、一段の石垣だけでは集中豪雨時に水があふれたと考えられます。そのため、水があふれないように、かつ水をより多く蓄えられるように、池の中心を東に移動させ上下二段の石垣に改修したのと考えられます。



発掘調査時の月ノ池 / 下段石垣



月ノ池からは、漆器椀①や灰軸陶器・天目茶碗②、箸③などの生活用品が多く出土しています。



戦国期 (旧) 月ノ池石垣

上下二段の石垣で囲まれているのが見て取れる



そこから北方向を見ると「大堀切」が「月ノ池」へ繋がっている



さて、ここが「大手虎口」/正面は緩やかに曲がった「大手通路」/西側から東方向に見たところ



左手を見たところ/「大手通路」の両側に配した檀状の曲輪





右手を見たところ/兵達の各種建物が再現されている



その更に右手を見たところ/前方のルートが金山城に登って来る車道脇で発掘調査されていた「大手口」からの「大手道」であろうか



振り返って進んで来た西方向を見たところ/前方の柵列のある所は「馬場曲輪」/右手に「大堀切」と「月ノ池」が見える





# 大手虎口

虎口は、城や城内の各曲輪への出入口部を指し、「小口」とも書かれます。敵の侵攻から城を守る重要な場所であり、門・櫓・塀・土塁・石垣などで厳重に守られています。また一方、虎口の「構え」は、「格の高さ」を示す空間ともなっています。

金山城跡にも数多くの虎口がありますが、なかでもこの大手虎口は、一大防御拠点として、また「城の格」を示す象徴的な場所として、最も重要な虎口と言えます。大手虎口は谷地形を利用して築かれ、月ノ池脇から正面土塁までの大規模な「構え」となっていました。月ノ池脇の門から続く緩やかに曲げた大手通路、それを守るため見下ろすように両側に配した壇状の曲輪とそこを守り場とした兵達の各種建物、大手通路の行く手をふさぐように築かれた正面土塁、横矢を射るために築かれた壇状の土塁などがありました。このような大規模で複雑な虎口の構造は、全国的にも特徴的であり、「難攻不落」を誇った金山城を象徴する場所の一つと言えます。

また、通路脇や曲輪内を走る石組み水路は、城の維持のために効果的に排水を行う往時の工夫であったと考えられます。



大手通路で見つかった二つの時期の門礎石（新-■ 旧-●）



現存石垣と転用・新補石材の間に鉛板を入れ区別しています



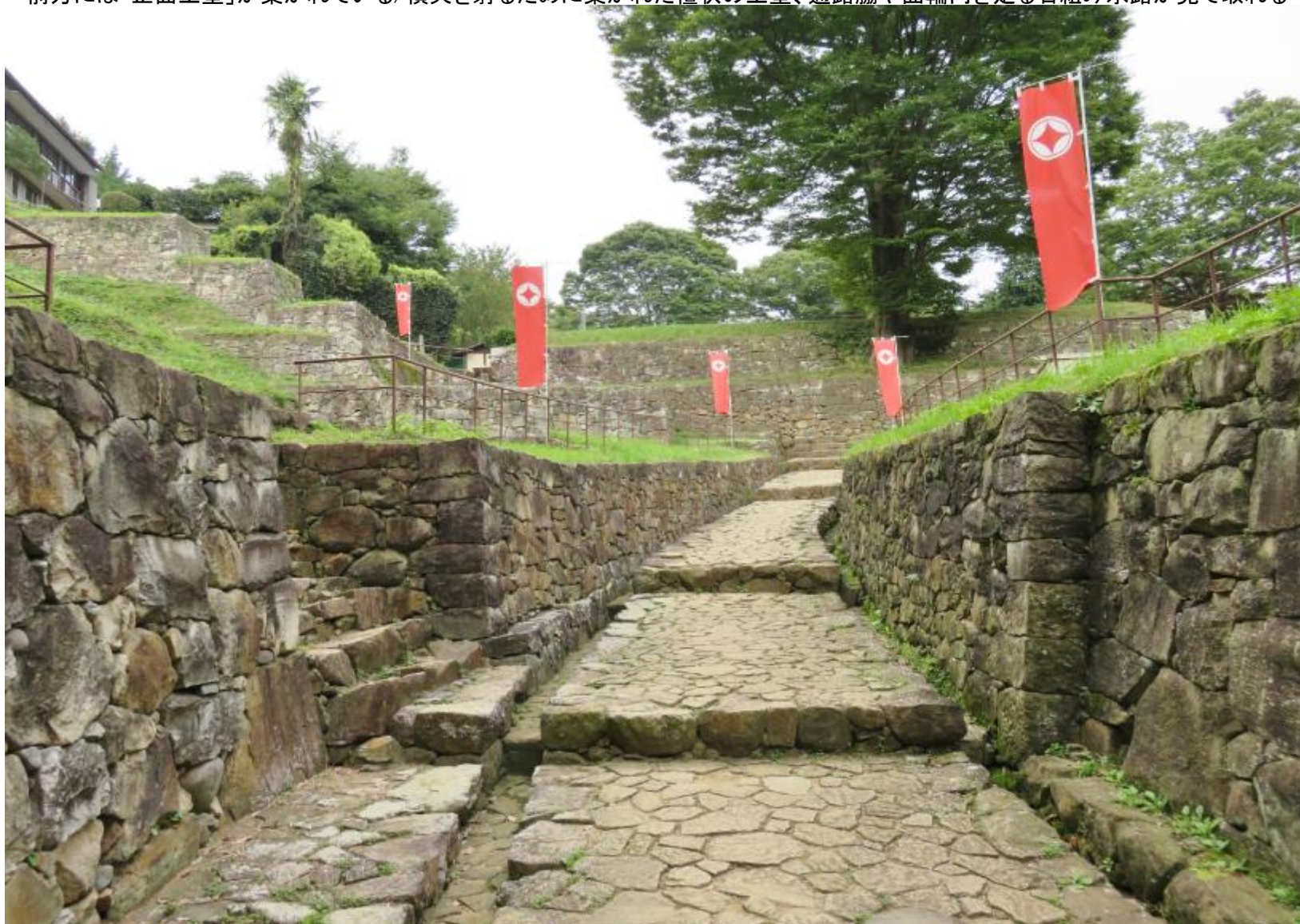
板を使って石垣の規模や構造を想定しました



さて、「大手通路」を進んでみよう/正面の通路床には門の礎石がある



前方には「正面土塁」が築かれている/横矢を射るために築かれた檀状の土塁、通路脇や曲輪内を走る石組み水路が見て取れる





左手を見たところ/「大手通路」の両側に配した檀状の曲輪/前方の石垣の右上にある建物のエリアは「三ノ丸」のようだ



右手を見たところ/再現されている建物の場所は「武器庫兼兵の詰め所」だったらしい



正面が「大手通路」の行く手をふさぐように築かれた「正面土塁」/その手前右手は「南通路」、左手は「北通路」



そこで振り返って「大手虎口」方向を見たところ



その右手を見たところ/正面には横矢を射るために築かれた檀状の土塁が見える/右上の建物があるエリアは「三ノ丸」のようだ



その檀状の「土墨石垣」から南方向を見たところ/「南通路」や檀状の曲輪に建つ「武器庫兼兵の詰め所」、そしてその一段上の「南曲輪」に建つ休憩所が見える/手前に説明坂がある



# 土塁石垣

関東地方の中世戦国期城郭では、土手のように土で築く土塁がほとんどですが、金山城の土塁は石垣で造られているのが特徴です。

三ノ丸から壇状に伸びた土塁石垣は、大手通路までせまり、その裏側に北側へ折れ曲がった通路を形作っています（北通路）。この土塁石垣では、調査の結果、5回にわたる改修の跡が見つかったため、石垣の一部は6回の構造の変遷を示す遺構としてそのままの姿で残しました。

なぜこれほど頻繁な改修が行われたかについては、解明されてないこともあります。周りから流れ込む雨水や浸透水、石積みの技術的な問題が考えられます。改修が行われるたびに、通路幅、石材の大きさ、土塁石垣の幅を変えるなどの工夫をしていましたが、3度目の改修の時には石垣の足元の石を石垣面より少し前面に出して据える（アゴ止め石）技法で崩落を防ごうとしていたことが確認されました。

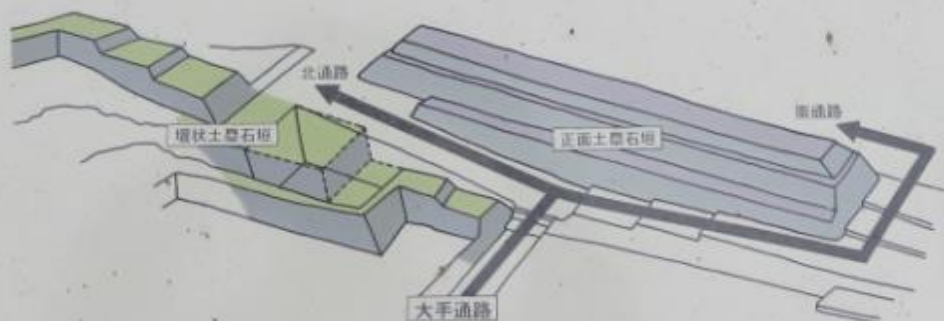
同じく、南通路の虎口でも2回の改修が行われ、位置を変えた水路跡や通路面が発見されました。

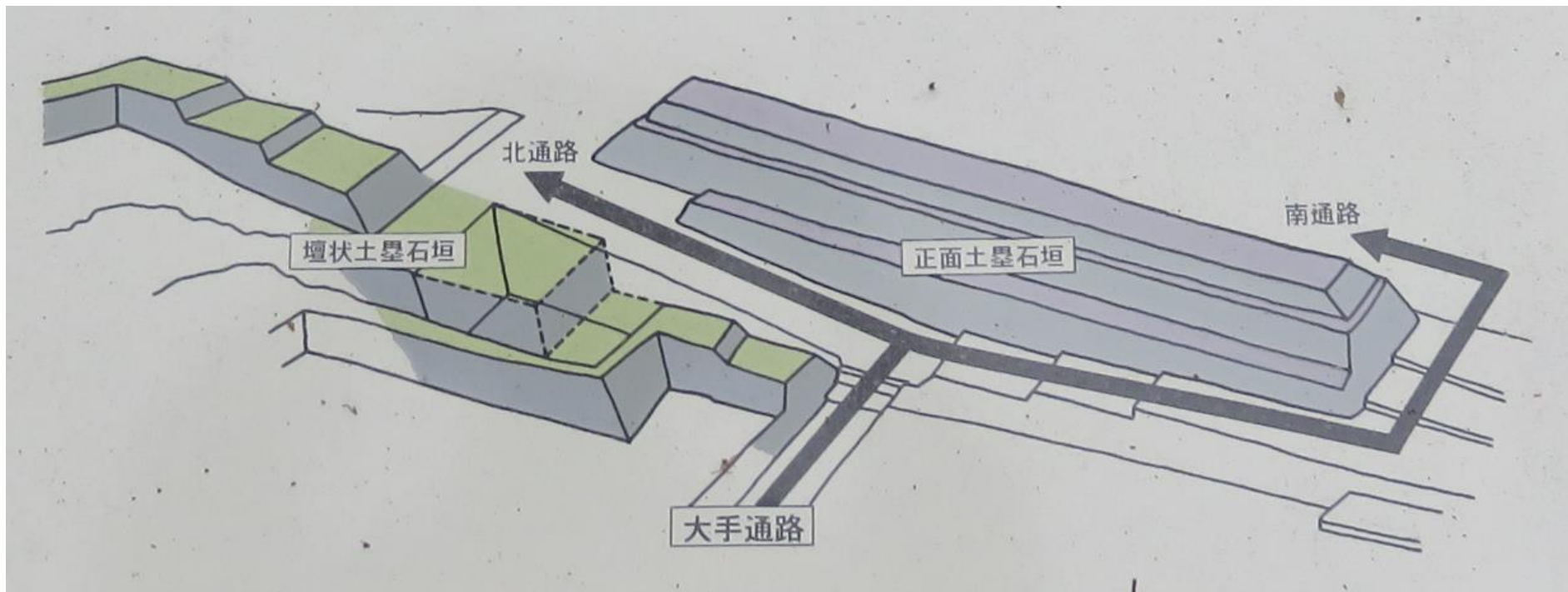


南通路の虎口で見つかった二つの時期の水路跡



壇状土塁石垣VI期変遷図







これが「土塁石垣」の6回にわたる構造の変遷を示す遺構



そこから「大手虎口」方向を見たところ/曲輪内を走る石組み水路が見て取れる



右手の石垣を見たところ



これは南側の檀状の曲輪(「大手虎口南上段曲輪」)を東側から西方向に見たところで、「武器庫兼兵の詰め所」と右手に「井戸跡」が見える/手前に説明坂がある



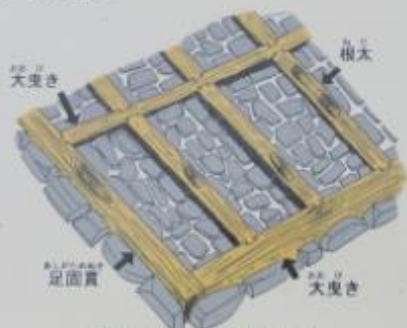
# 大手虎口南上段曲輪

大手虎口南上段曲輪からは、石敷きされた建物の基礎やカマド、井戸址が見つかりました。大手虎口を守った兵たちの、生活のにおいが感じられる曲輪です。

建物は、基礎が石敷きされており、この石敷き基礎には、幅約25～30cmの溝が碁盤の目のように見られました。これは、建物の柱や床板を支えるための「大曳き」や「根太木」などを置く溝で、建物の基礎が石敷きされているのは、湿気を防ぐためだったと考えられます。建物の東脇からはカマドが見つかり、建物から火気を遠ざけていたと思われる。このことから、建物は火薬などを備蓄した「武器庫」を兼ねた「兵の詰め所」だったと考えられます。整備では、石敷きされた基礎の一部が見学できるように、「遺構展示施設」として建物を造りました。

井戸址には、一辺約1.5m、深さ約3mで石組みされていました。石組みの下部には、マツ材でできた井戸枠がそのまま残っています。

また、大手虎口南上段曲輪の石敷き建物址の西脇は、古い時期に通路であったこともわかりました。この古い時期の通路は、スロープ状に北から南へ上がっていました。しかし、最終的には埋め戻され、通路開口部は石垣によってふさがれていました。



建物基礎の様子(模式図)



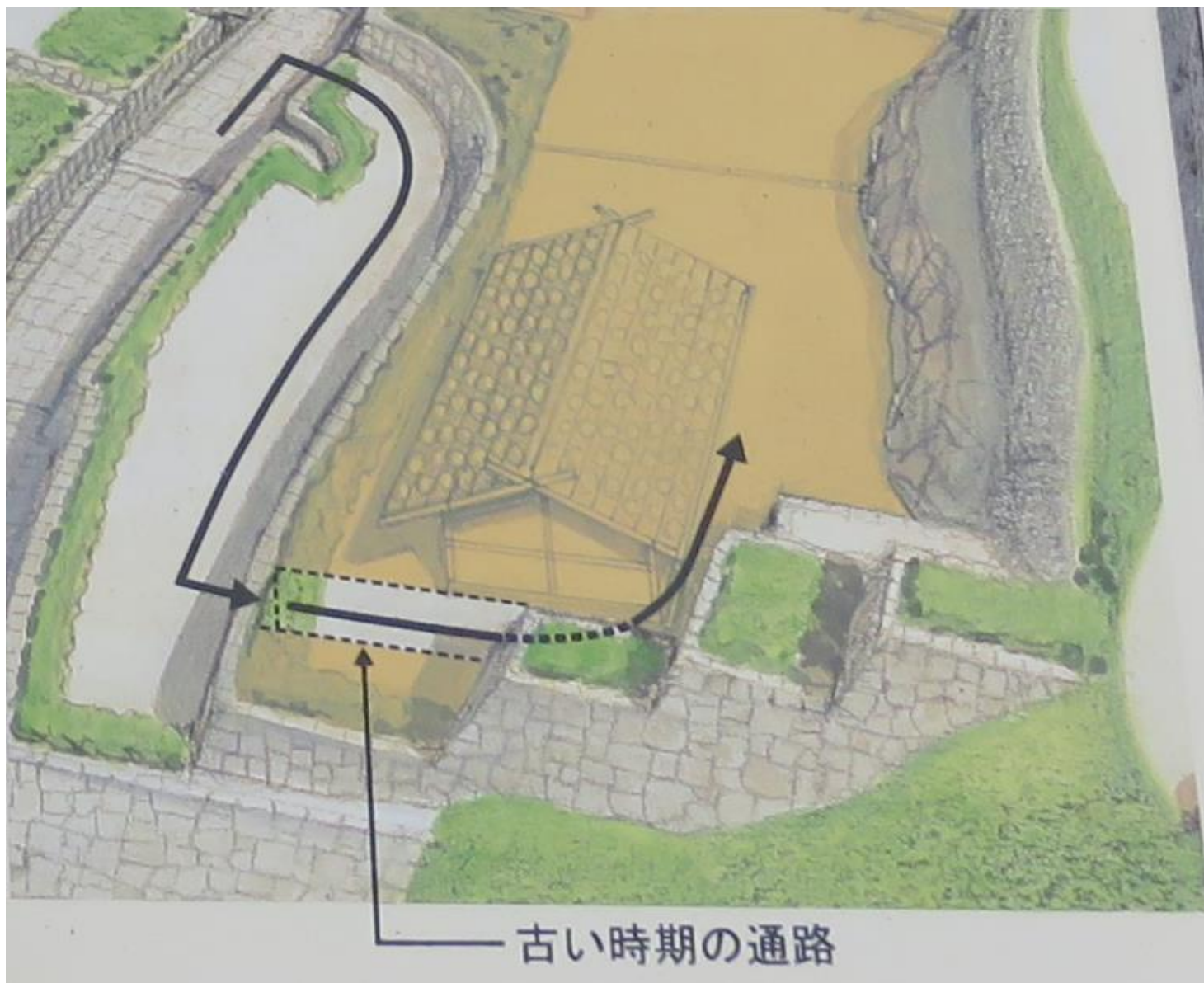
調査時の石敷き建物址基礎とカマド



調査時の井戸址



古い時期の通路



これが「井戸跡」/その向こうに「北通路」と「土塁石垣」が見える



# 井戸跡

虎口曲輪で生活していた武士達が使用していた井戸と思われる。井戸底に補強のための木枠が残っています。





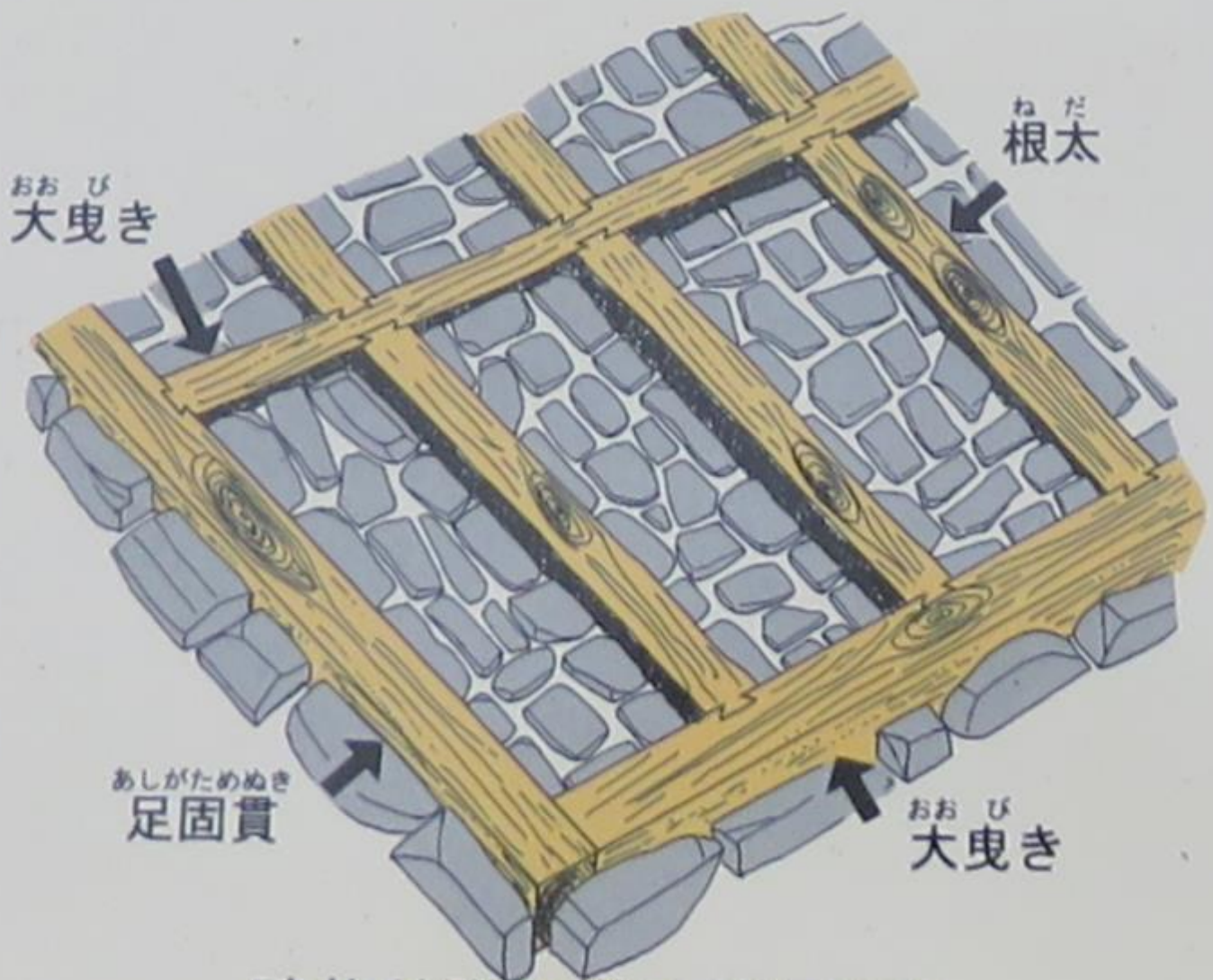
ここは「武器庫兼兵の詰め所」に併設された「カマド跡」



# カマド跡

敵の侵攻に備える武士達を使用したカマドです。  
昔は建物の外にカマドを設けたことがありました。





建物基礎の様子(模式図)

これは「大手虎口南上段曲輪」から北側の檀状の曲輪を見たところ



その左手を見下ろしたところ/「大手虎口」や「大堀切」、「月ノ池」が見える



右手の「正面土塁」方向を見たところ/こちらの檀状の曲輪からここを回って「南通路」へのアクセスルートが古い時期の通路という





前方が「南通路」/右上は「南曲輪」



その「南通路」を進む



前方に「日ノ池」がある



振り返って「大手虎口南上段曲輪」方向を見たところ



これが「日ノ池」/2箇所石組み井戸が見える/説明坂もある



# 日ノ池

日ノ池は、15m×16.5mのほぼ円形の池です。発掘調査によって、石垣や石敷、2箇所の石組み井戸、石階段などが発見されました。さらに石敷の下からは、日ノ池へ通じる通路跡や改修工事が行われた跡、また、谷をせき止め、斜面からの流水や湧き水を貯める構造になっていることも分かりました。これらの調査の結果をもとに、往時の姿を可能な限り再現しています。石垣や石敷はできる限り当時のままに残しました。

日ノ池は、山の上では希な大池であり、金山城における象徴的な場所の一つです。ここは、単に生活用水を確保した場所ではなく、戦勝や雨乞などの祈願を行った儀式的場所であったと考えられます。

また、水の信仰とかかわる平安時代の遺物も発見されており、日ノ池が立地する場所は、築城以前から神聖な場所であったようです。



当時のままの石垣・石敷を残しました ①



調査によって見つかった井戸跡 ②



日ノ池へ通じる通路をふさいだ石垣（池側から） ③

石組み井戸



別の角度から見たところ

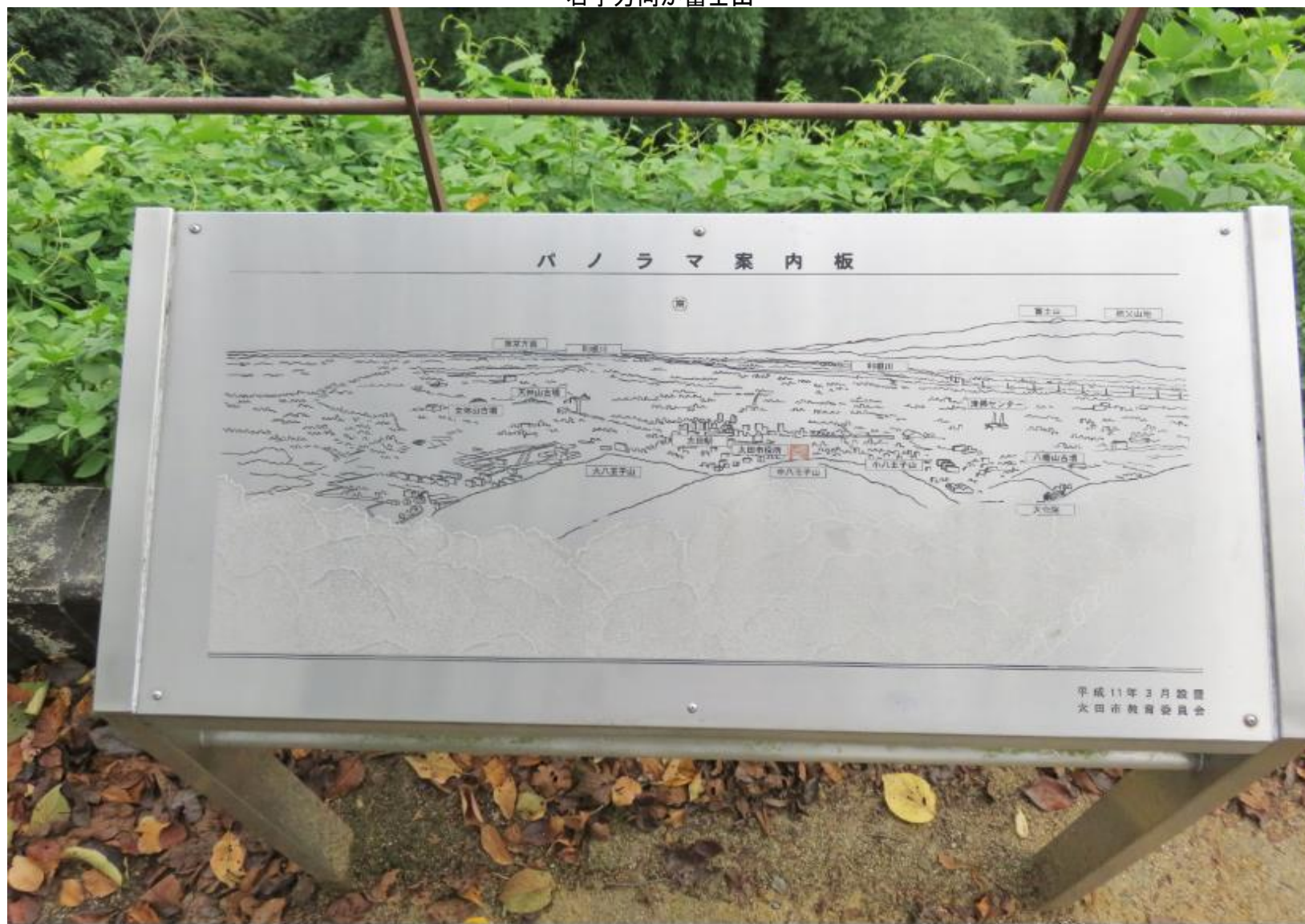




さて、ここは「南曲輪」/「関東の富士見百景」となっているようだ



右手方向が富士山



曇っていて良く見えない



中島知久平の胸像



金山城跡の説明板



# 史跡 金山城跡

古くから金山山頂には、古く(戦国)末期の史料(1570)に記述されているが、その後、詳細については不明瞭な城跡となっていた。その後、1970年代に、上野市、赤松氏、守田氏、佐野氏など戦国時代の諸氏が、この山頂に、その地勢に基づく城跡を築いた。天正10年(1582)に、赤松氏に属する守田氏の城主、守田氏由良が、この山頂に、金山城跡(金山城跡)を築いた。守田氏由良の家臣が、この山頂に居た。守田氏由良の家臣が、この山頂に居た。守田氏由良の家臣が、この山頂に居た。

年次	出来事
1570	金山城跡の築城
1571	金山城跡の築城
1572	金山城跡の築城
1573	金山城跡の築城
1574	金山城跡の築城
1575	金山城跡の築城
1576	金山城跡の築城
1577	金山城跡の築城
1578	金山城跡の築城
1579	金山城跡の築城
1580	金山城跡の築城
1581	金山城跡の築城
1582	金山城跡の築城
1583	金山城跡の築城
1584	金山城跡の築城
1585	金山城跡の築城
1586	金山城跡の築城
1587	金山城跡の築城
1588	金山城跡の築城
1589	金山城跡の築城
1590	金山城跡の築城
1591	金山城跡の築城
1592	金山城跡の築城
1593	金山城跡の築城
1594	金山城跡の築城
1595	金山城跡の築城
1596	金山城跡の築城
1597	金山城跡の築城
1598	金山城跡の築城
1599	金山城跡の築城
1600	金山城跡の築城



群馬県太田市  
太田市教育委員会

金山城跡の地形模型がある





日本百名城

金山城

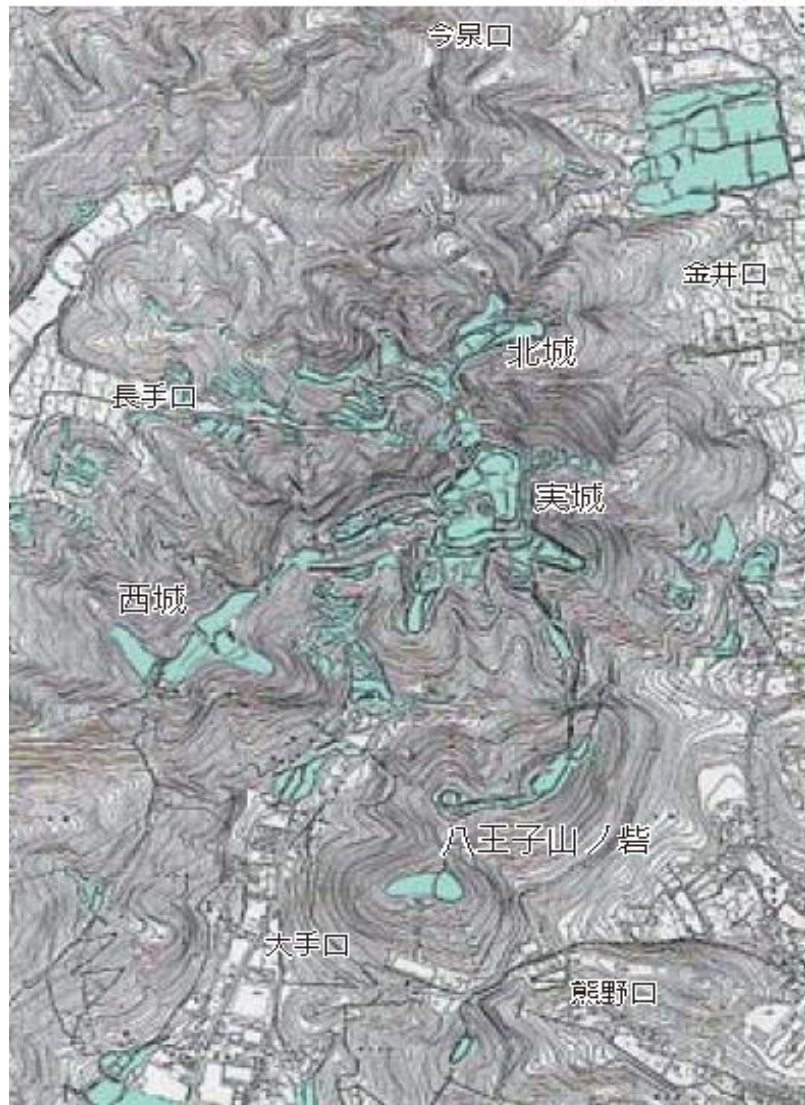
平成18年4月6日

財団法人 日本城郭協会選定





金山城跡縄張り図



南側から見た地形



「月ノ池」(左手)と「日ノ池」が見て取れる



「南曲輪」から「日ノ池」を見下ろしたところ/池の向こうは「北通路」/建物の左手に石碑が立っている



さて、手前が「正面土塁」から回り込んだ「北通路」



これが「南曲輪」から見た石碑/その向こうに行き先表示がある



実城 ▶  
(本丸)

THE KANAYAMA CASTLE RUINS



「実城」方向へ進むとまた石碑が立っている





石碑文

登古半仁

母可茂

志良登保布

織尔意多屋ま乃

毛流やま野

有羅閑補せな那

「万葉集」

志良登保布

乎爾比多夜麻乃

毛流夜麻能

宇良賀礼勢奈那

登許波爾毛我母

(卷十四 東歌 三四三六)

大意

人に立ち入らせずに保護している小新田山の  
木々の葉のように、末枯れすることなく、い  
つまでも水々しく元気でいたものだ。

(岩波書店刊 日本古典文学  
大系「万葉集」による)

先に進もう



ここは「御台所曲輪」/南側から北方向を見たところ



右手を見たところ



振り返ると階段がある



階段を下りて見る



階段を下りて西方向を見たところ

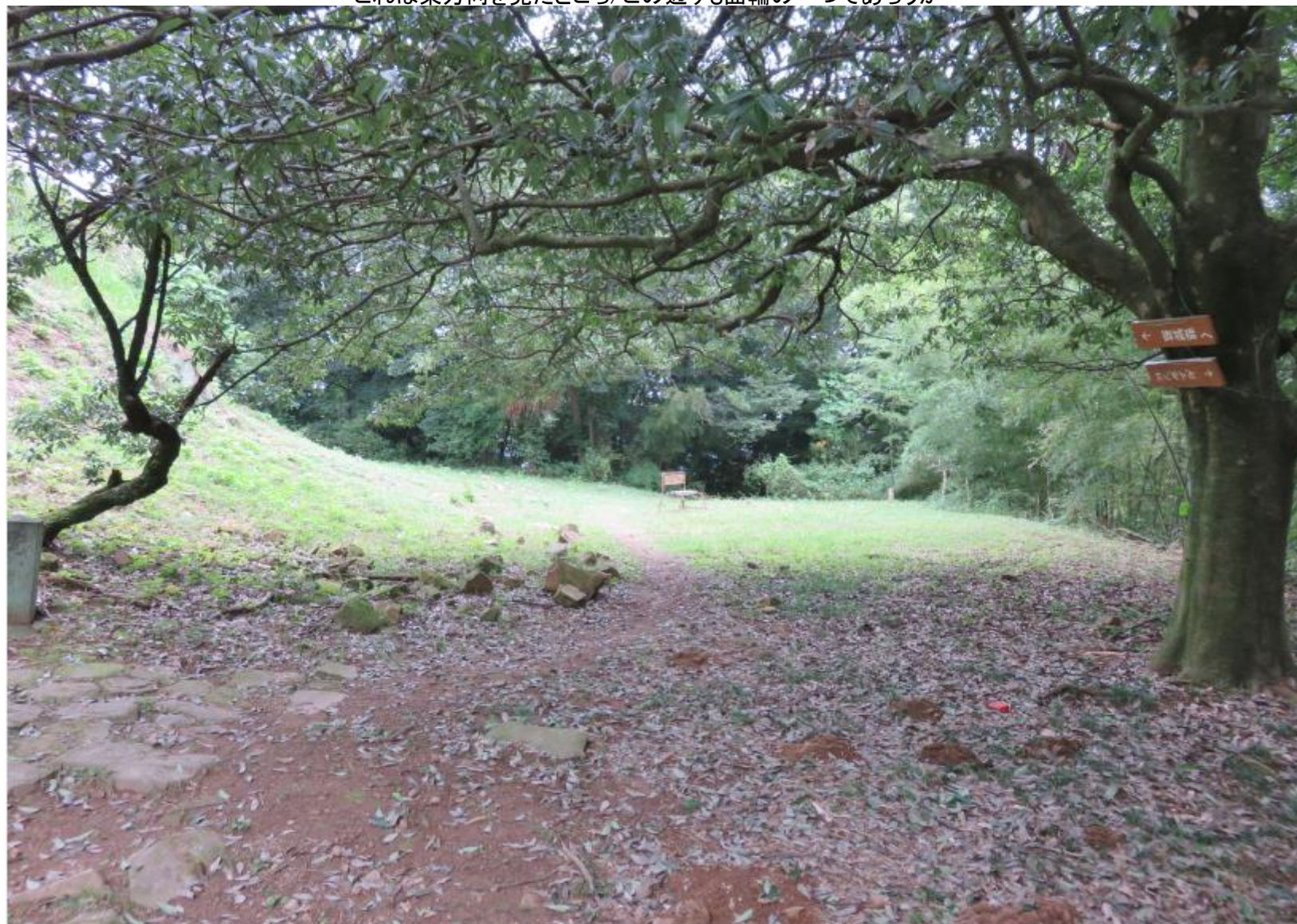


右手には石碑が立っている/「漢落碑」と記されている





これは東方向を見たところ/この辺りも曲輪の一つであろうか



階段を見上げたところ/ここは「実城(本丸)」にある新田神社への参道になっている



階段を登って「御台所曲輪」へ戻ったところ/説明板が立っている



## 本城

金山城の中核で、水ノ手郭を中心として約一万坪ある。実城みじょうとも言い城主の御殿があった所なので城主を実城殿とも呼んだ。

御殿の礎石は、大櫓の南方平地に列石状に出土した。主要郭は六ヶ所、腰郭は三ヶ所、武者造り、堀切りは壕内道を兼ねている。

本城内に於て、実城、内方、小座、旦那、御入、局等の名称が見られる。

昭和五十五年三月

文部省  
群馬県  
太田市

振り返ると「御臺所趾」と記された標柱が立っている



正面は「金山の大ケヤキ」/右手に説明板がある



太田市指定天然記念物

## 金山の大ケヤキ

- 指定年月日 平成21年5月20日
- 所在地 太田市金山町40番132

ケヤキは、落葉高木で東アジアの一部と日本に分布します。日本では本州・四国・九州に分布、暖地では丘陵部～山地、寒冷地では平地まで自生し、高さ20～25mの大木となります。

本樹木は金山山頂にある、樹高17m、目通り周6.79mの大ケヤキです。樹高はそれほど高くはありませんが、目通り周においては県内でも上位に位置し、枝張りも40mを超えます。金山山頂の金山城実城域にあり、推定樹齢800年ほどとも伝えられる大木で、金山のシンボリック的存在です。樹勢が良好で、まとまった幹を持っており樹形も大変趣があります。また神社の参道脇にあることから御神木と同様の扱いを受けていたと思われます。



金山の大ケヤキ  
(5月)



金山の大ケヤキ  
(冬)

昭和初期までケヤキの大木は7本あったといわれていますが、現在は1本のみです。推定樹齢800年ほどであるとすれば、金山城の興亡を見てきた歴史の証人ともいえます。

平成24年3月1日

太田市教育委員会

さて、「御台所曲輪」を更に北方向に進むと階段上に新田神社の拝殿が見える





階段手前の右手を見たところ/この辺りの平場まで「御台所曲輪」であろうか/正面奥は通路になっているようだ



こんな塩梅/こちらには後程行ってみよう



これは階段手前の左手を見たところ/この先が「三ノ丸」のようだ



これは「実城(本丸)」下にある梅若稲荷神社への階段





さて、これが「実城(本丸)」に建つ新田神社の拝殿



振り返って「御台所曲輪」方向を見下ろしたところ



新田神社拝殿





# 護記

## 一、ご祭神

贈正一位左近衛中将源朝臣新田義貞公

## 一、ご由緒

明治六年八月三日 栃木県知事鍋島幹神社

同十三年四月八日 造営竣工

創建を許可す

昭和九年十二月九日 金山城址全域を文部省より名勝天然記念物として指定された。

同五十四年五月八日 神社創建百周年記念式典が挙行され高松宮宣仁親王・喜久子妃殿下が参拝された。

これまでに、大正天皇・昭和天皇・秩父宮殿下・高松宮殿下・三笠宮殿下のご参拝を戴いて居ります。

## 三、例祭

一月一日 元旦祭

二月十一日 建国記念祭

四月八日 春季例大祭

十一月二日 秋季例大祭

初志貫徹を祈願して参拝する方が多い

新田神社宮司青木繁徳

左手が拝殿、右手が本殿



「実城(本丸)」を東側から西方向に見たところ



標柱と説明板が立っている





金山城址

金山城主系図

義重(新田) — 義兼 — 義房 — 政義 — 政氏

基氏 — 朝氏 — 義貞 — 義宗 — 満純(岩松)

家純(新田) — 明純 — 尚純 — 昌純

氏純 — 守純

国繁(横瀬) — 業繁 — 景繁 — 泰繁 — 成繁(由良)

国繁

昭和五十五年三月

文部省  
群馬県  
太田市

こちらにも「本丸陞」と記された標柱がある



別の説明坂もある/劣化していて良く読めない





これは「実城(本丸)」を西側から東方向に見たところ



これは新田神社の左手に建つ御嶽神社拝殿



## 御嶽神社の由緒

### 創立

新田神社二代社堂青木康次郎正経が、金山山頂の草むらにあつた御嶽神社の銘がある石の祠（ほこら）と、太田市下田島の岩松新田家（県立太田フレックス高校）に祭られていた御嶽大神の社殿を請い受けて、太田市毛里田・東今泉・東金井・藍川・旧太田の信徒数百名と相計り、旧尾州（今の愛知県西）の城主徳川従一位源慶勝公の援助に依り、明治六年九月本殿を建て同八年十一月 拝殿竣工、同十二年九月 無格社に列せられた。

### 祭神

#### 国乃常立神（くにのとこたちのかみ）

国の神格化である神・万物の生命活動の源の神  
神徳 国土安穩・出世成功・開運招福

#### 大己貴神（おおなむちのかみ）

大國主命で大黒様、またの名を大穴年速神・葦原色許男神  
八千丈神・大物主命などともいう。それだけ多様な性格を持ち、霊的な力も強力。大変ハンサムで、野生的で、力強い神。六人もの有名な女神と結婚し、百八十一柱の神をつくった。  
神徳 縁結び・子授け・夫婦和合・五穀豊穡・商売繁盛

#### 少彦名神（すくなひこなのかみ）

海の彼方の常世の国から光り輝いて来られた小人身神。  
一寸法師のルーツ、大國主命と組んで國造りの大事業を成し遂げ性格は明るくユーモラスで、豊かな技術と知識を兼ね備えた神。  
如何なる困難も克服した精神的に強い神。  
神徳 医薬・酒・温泉・農業の神・高難を救つて安産・育児の守護神

### 祭日

一月一日	歳旦祭
四月九日	春祭り
十月九日	秋祭り
十二月二十二日	冬至星祭り

平成十九年五月吉日 宮司 青木 繁徳

御嶽神社社殿の側面を見たところ/左手奥が本殿



これが本殿



これはその更に左手に建つ梅若稲荷神社



この鳥居を潜って社殿に進む



振り返ると先程下から見上げた場所が見える

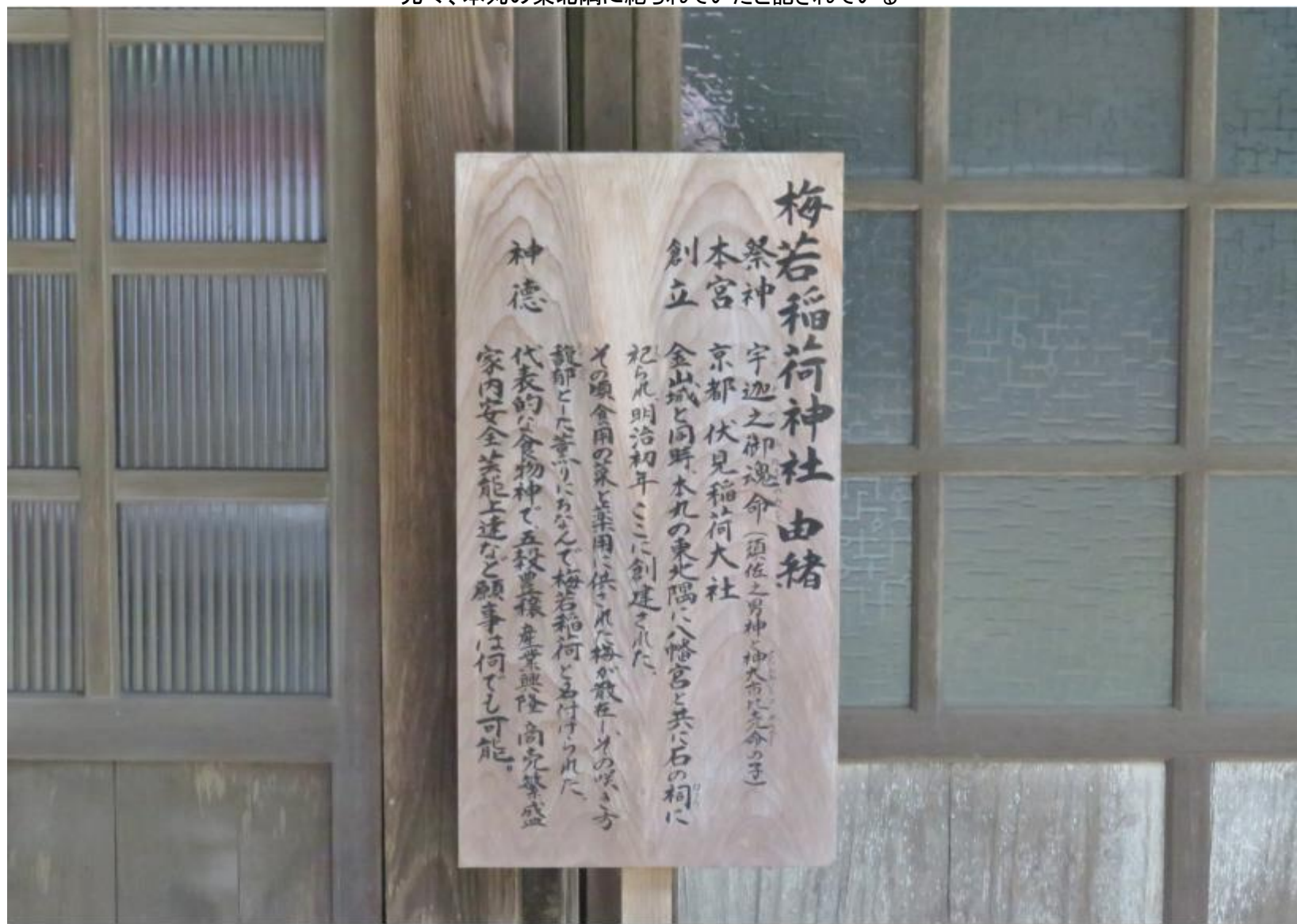




梅若稻荷神社拝殿



元々、本丸の東北隅に祀られていたと記されている



これが梅若稲荷神社本殿



傍にこんなものもあった



さて、ここは実城(本丸)の東北隅/さまざまな石造物がある





義貞願文子孫  
中必有起大軍者

源太郎 政邦 印

腰掛石が並ぶ/梅若稲荷神社もこの辺りに祀られていたのであろうか



さて、これは「実城(本丸)」の西側に下りると堀跡と思われる所があり、北側から南方向を見たところ/左手が「実城(本丸)」





振り返って北方向を見たところ/やはり堀切のようだ/右手が「実城(本丸)」、左手は「二ノ丸」のエリア



少し進んで右手を見上げると石垣がある/右上の建物は梅若稲荷神社社殿



振り返って堀切を見たところ/左手に石垣を見たところ/右手は「二ノ丸」のエリア



石垣をアップで見たところ



その先の左手を下りて行くと「ぐんまこどもの国」や「金山の森キャンプ場」へ行けるようだ



右手は「実城(本丸)」を取り巻くように平場が延びている/右手に石垣と説明板が見える



足元に「本丸残存石垣」と記された標柱が立っている



# 金山城石垣

金山城は、全域を石垣で築かれた関東地方では珍しい城である。

石垣用材は、金山石が手近にあるので使用したものであるが、大きな石は、柱状節理の山麓の根石を山頂、山腹まで持ち上げた大工事である。積み方は、「野面積のづらづみ」で長い石の大きい面を奥に、小さい面を表にしてあるため、別名、「ゴボウ積」とも言われる。断面は、直線的で、緩傾斜し、栗石を充分使用しているために堅固である。

昭和五十五年三月

文部省  
群馬県  
太田市



野面積(ゴボウ積)の石垣



少し進むと右手に倒れた説明板と標柱がある/右上が「実城(本丸)」



標柱には「本丸裏馬場跡」と記されている



# 天主曲輪裏馬場

馬場と言つが、實際は、馬屋のある郭である。馬は山城でも伝令用として使われたので、馬戸の必要があるが、音に敏感な動物のため、敵の攻撃にさらされまいと、城郭でも静かな裏側に設けられた。ここには、馬薬用としての「さいかち」が、植えられてある。

昭和五十五年四月

文部省  
群馬県  
太田市

「本丸裏馬場跡」を更に進む/右上は「実城(本丸)」



するとまた、標柱が見える



ここは「武者走り」らしい



振り返って進んで来た方向を見たところ/左上が「実城(本丸)」





また少し進むと一寸開けた場所に出た



そこから南方向を見下ろしたところ



更にその先に進もう



何んと新田神社のある「実城(本丸)」への階段手前の右手にあった「御台所曲輪」の平場に出た





北城  
(板中城)

18 総合案内板

西城

見附出丸

16  
17

トイレ

P

駐車場  
(金山モータープール)

鍛冶曲輪

史跡金山城跡ガイド施設

八王子山ノ砦

松風峠

至 太田桐生IC

金山城鳥瞰図(南から)

至 太田市街

さて、「西城」まで戻り、今度は「見附出丸」方向へ行ってみよう



西方向へ進む/すぐに土塁状の地形が見えてくる



正面は南北に延びる土塁





ここは喰い違い虎口となっており、正面が土橋で両サイドが堀跡



右手の堀跡を見たところ



右手の土塁上に登って北方向を見たところ/左手は堀跡



そこで右手の「西城」エリアを見たところ



振り返って「見附出丸」のある西方向を見たところ/標柱が立っている



左手は「見附塹壕」、右手は「西城筋違城門」と記されている/背後には堀跡と土塁が見える



土塁には石積みが残っている所がある



アップで見たところ





堀底に下りて北側から南方向を見たところ/左手が石積み



振り返って北方向を見たところ/堀跡は縦堀状になって下っている



喰い違い虎口を西側から東方向に見たところ



右手の土塁上に登って南方向を見たところ



反対側から北方向を見たところ



土塁の左側を見たところ



同じく右側を見たところ



さて、「見附出丸」へと西方向に進もう





少し進むと前方が開けている



このエリアが「見附出丸」のようだ



前方は「南土塁」/説明坂がある





左手を見上げたところ/右手は「南土塁」



「見附出丸」の西側にはこのような「虎口」がある



前方に進んでみよう



堀切を渡る土橋がある





左手を見たところ



右手を見たところ



土橋を渡って振り返って見たところ



少し退いて見たところ/左手に標柱が立っている



「大手前塹壕」と記されているが



さて、更に西方向へ進む



このまま、まっすぐ西方向に進むと「長手、浅間神社」方向、左手に下りて行くと「大光院」へと至るようだ



「長手、浅間神社」方向





「大光院」方向



振り返って進んで来た東方向を見たところ



さて、ここがその大光院/正面は大阪夏の陣の年に建立されたと言う吉祥門



標柱と説明板が立っている



太田市指定  
重要文化財

だいこういんきつしょうもん  
大光院吉祥門

●所在地 太田市金山町三七番八号

●指定年月日 昭和四十七年（一九七二年）九月二十六日

「香籠様」の名で親しまれている大光院は慶長十八年（一六一三）徳川家康がその祖とした新田義重（源義家孫・新田氏祖）を勧善するため創建したものである。寺名の義重山新田寺大光院は義重の法号「大光院殿方山西公大禪定門」による。寺領三百石、徳川幕府が定めた浄土宗の学問所閑東十八檀林の一寺となる。

初代住職には江戸芝増上寺の親智国師四哲の一人香籠上人が迎えられた。香籠は庶民教育に心をくだし、生活困窮者の子供を弟子の名目で養育、その高徳により「子育て香籠」として信仰を今に集めている。

吉祥門は元和元年（一六一五）に中門として建立されたと伝えられている。名前の由来について次のような言い伝えがある。この山門が上棟された日に大阪城が落城し、徳川方にとってめでたく記念すべきことであったので、徳川家康により吉祥門と名付けられたという。

吉祥門は間口三間、奥行一間の切り妻造り、檼瓦葺である。比較的簡素にできているが、瓦の葺き替え・袖垣の修理のほかはほとんど当時のまま保存され古式をよく残している。大光院創建期の姿を伝えているといわれる本堂内陣・大方丈・小方丈・庫裏とともに、本市における数少ない近世初頭の建築物として重要なものである。

平成四年（一九九二年）二月二十九日

太田市教育委員会

境内から吉祥門を見たところ



振り返って境内を見たところ



本堂

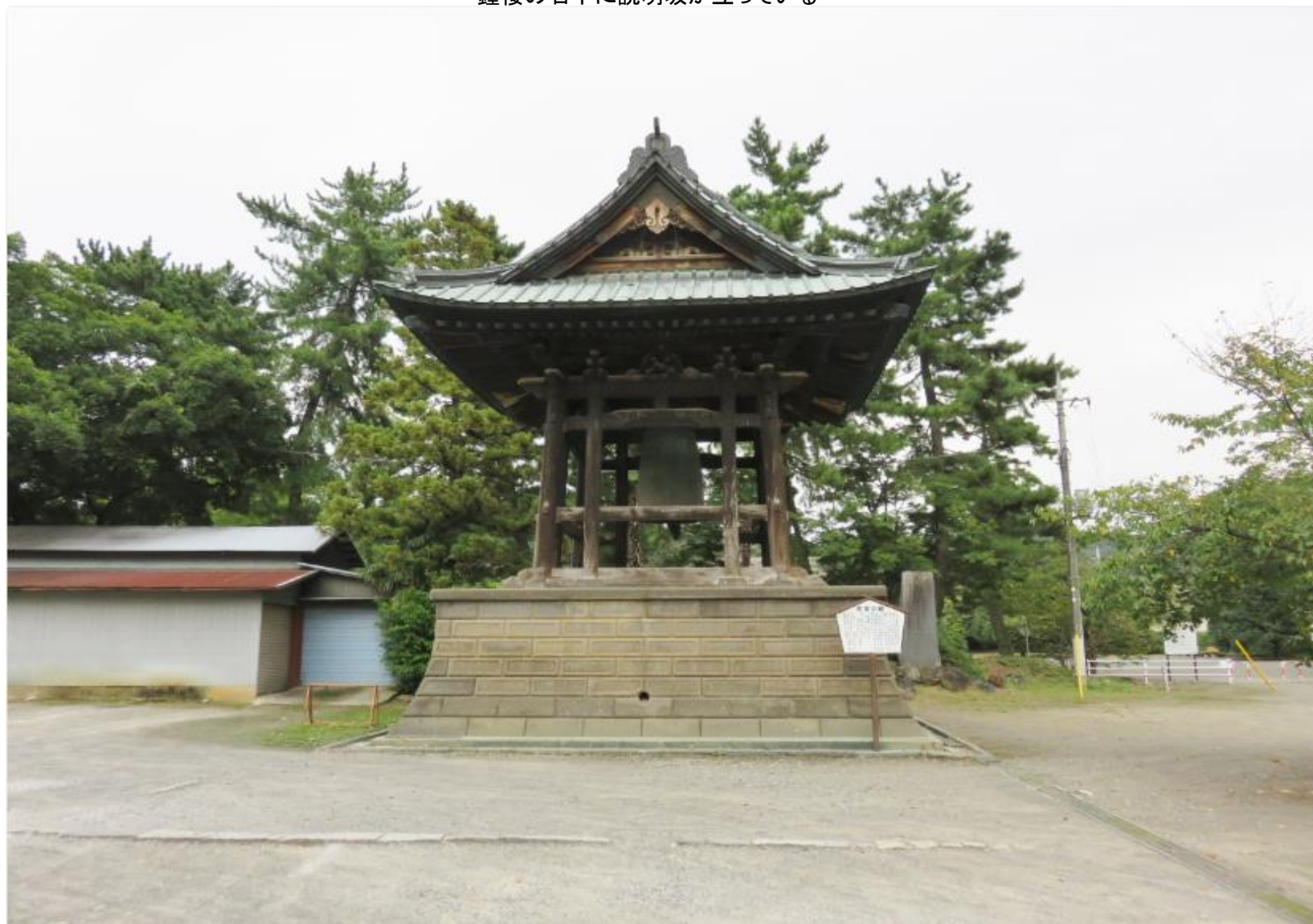




開山堂



鐘樓の右下に説明板が立っている



# 慈愛の鐘

当義重山大光院新田寺は  
慶長十八年徳川家康公によつて  
建立された関東八壇林隨一の  
寺でこの梵鐘は明治四十二年  
鑄造されたが大平洋戦争で供  
出されたまゝであつた  
昭和三十一年春龍上人生誕四  
百年を記念して当山六十八世  
大誓靈海師の発願によつて再鑄  
造されたもので  
総重量 八百五十貫  
口徑 四尺三寸  
越中高岡在住の鑄匠  
香取正彦氏（人間国宝）  
老子治右工門氏  
の製作により昭和三十三年十  
月に完成落慶を見たものでそ  
の名の通り沢く衆生に慈愛の徳  
を賜わるものである

中謹

寺域に「南曲輪」に胸像があった中島知久平に関する説明坂があった/背後の高まりは土塁の名残りらしい



参考ホームページ

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/003gunma/010kanayama/kanayama.html>

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/003gunma/011kanayamanishi/kanayamanishi.html>

<http://www65.tok2.com/home2/yogokun/kanayamaoota.htm>

<http://umoretakojo.jp/Shiro/Kantou/Gunma/Ota-Kanayama/index.htm>

<http://www.b-gunma.com/kanayamajou.php>

<http://4619.web.fc2.com/shiro1.html>

<http://www.geocities.jp/qbpb900/kanayama.html>

[http://www.pasonisan.com/rvw\\_trip/12\\_02ota-nittakanayama.html](http://www.pasonisan.com/rvw_trip/12_02ota-nittakanayama.html)

<http://www.sengoku.jp.net/kanto/shiro/kanayama-jo/>

<http://japan-web-magazine.com/japanese/castle/gunma/kanayama-castle/index.html>

<http://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/topics/files/kanayamajoato.pamph.pdf>

<http://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/topics/files/h28kanayamajyoleaf.pdf>

